

一般国道 1 号袋井バイパス (袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

—坂尻遺跡第 1 次調査—

— 1 9 8 1 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

は じ め に

今日は産業のめざましい発展と経済の高度成長に伴って、地域の開発や社会の変貌は激しく且つ急速であります。そしてそれは何処も同じ現象であろうと思いますが、ここ袋井市も、首都経済圏と関西経済圏を結ぶ廊下性のほぼ中間に位置し、東海道メガロポリスの一小都市として、地域の開発・変化は著しいものがあります。

こうした中で、開発が活発化し、それが大規模であればあるほど多種多様な問題が生じてくるものであります。そのひとつに文化財の問題があります。開発は文化財にとっては危機であるといえましょう。

保存か開発か。——企業や地域住民にとって「開発」は強い願望であり大きな関心事であるだけに、文化財行政としては悩みが多く、その範囲、程度、期間……等々その判断をためらう例が少なくはありません。その中でも消えて行こうとする遺跡を、どのように掘り、その発掘調査そのもの、そしてその成果をどう地域に伝えていくか、また将来とも地域の学習にいかに関活用してもらうか、考えていくと気にかかることが多いものであります。

ところで、本市を東西に通る国道1号の交通量は高度経済成長の伸展とともに年々増大するばかりで、そのバイパス路の工事が早くから望まれていました。しかし、本市域内のバイパスはオイルショックで中断され、最近漸く再開されることになりました。

袋井地域のバイパス路線内には、今回報告いたします坂尻遺跡（石ノ形遺跡）をはじめ現在3か所確認されている遺跡があります。遺跡範囲を確定するにあたり、現地表面の観察だけでは、どうしてもその正確さに限界があり、今回の第1次発掘調査は、坂尻遺跡についてその範囲を明確にすることを第1義的目的として実施したものであります。

記すまでもなく、発掘調査はなかなか骨の折れる仕事であり、神経を使うものであろうと推察いたします。多くの問題が発生したり困難な局面に遭遇した折など、絶大なご尽力と適切なご指導を賜りました県教委文化課の課長さんはじめ諸先生方に心から感謝の意を表します。

また寒風吹き荒ぶなか、むずかしい調査活動に従事していただきました調査補助員・作業員の皆様方、発掘調査をあたたく見守り応援してくださいました地元の皆様方など、この調査に関係されました多くの方々のご協力、ご支援があってはじめて坂尻遺跡第1次調査を完了することができたのでありまして、心からお礼申しあげます。

昭和56年3月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は昭和55年12月18日から昭和56年3月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査（坂尻遺跡第1次発掘調査）報告書である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 本遺跡は石ノ形遺跡としてあつかってきたが、第1次調査の結果、石ノ形遺跡と区分できるので、本報告を含め、今後は本遺跡名を坂尻遺跡と称することとした。
4. 発掘調査は吉岡伸夫、永井義博（袋井市教育委員会 社会教育課）を調査担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
5. 資料整理は吉岡が中心となり行なったが、出土遺物については、そのほとんどを鈴木敏則（奈良教育大学学生）平賀 太（奈良大学学生）が行ない、遺構図面等の整理は西井幸雄（立正大学学生）が行なった。
6. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。

安達貞信、石川一二、石川隆司、岩崎好二、加藤幸太郎、小林金次郎、原田米次、松下円平、三浦久雄、三浦政平、浅井征江、鈴木咲子、鈴木みず江、寺田せつ子、寺田秀子、寺田松枝、仲根世始子、名倉保子、早川里美、早川はるみ、早川保子、前田庄一（以上袋井）、山本宏司（駒沢大学学生）

ここに記して深く感謝の意を表したい。
7. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章第2節 第2章第1節……………永井義博
第1章第3節……………鈴木みず江、早川保子の原稿をできるかぎり原文に
忠実に吉岡が抜すいし、まとめた。
第2章第2節中「その他の遺物」……………西井幸雄
第1章第1節、第2章第2節中「土器」、第3節……………吉岡伸夫
8. 出土土器観察表の作成、及び本書の編集は吉岡が行なった。また編集の過程で西井幸雄から多くの助言を得た。
9. 調査資料はすべて、袋井市教育委員会が保管している。
10. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行なった。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 地理的環境、歴史的環境	1
第3節 発掘調査の経過	3
第2章 遺 跡	5
第1節 土層、遺構	5
第2節 出土遺物	12
i) 土器	
ii) その他の遺物	
第3章 まとめ	15

挿 図 目 次

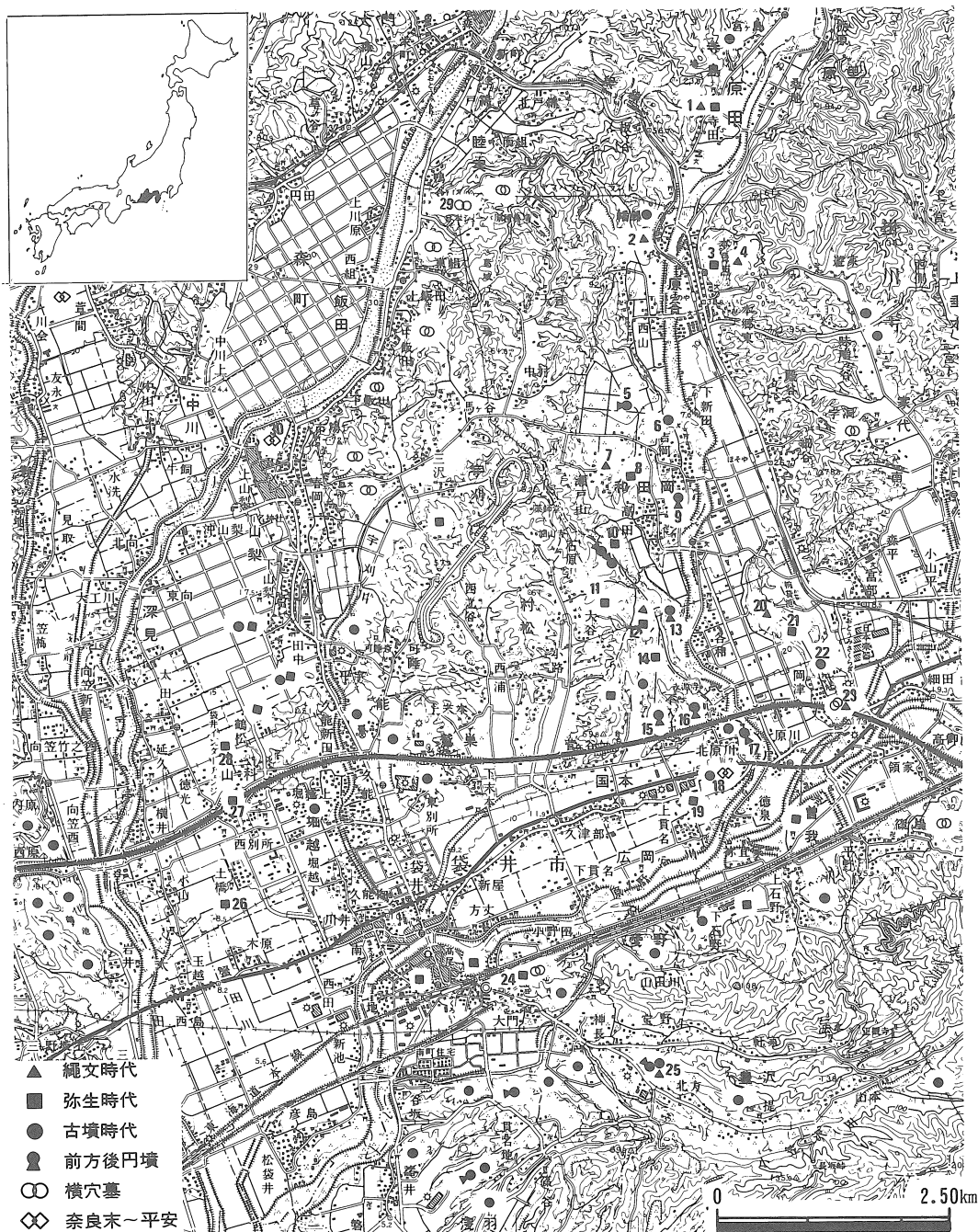
第1図	袋井市周辺の主要遺跡分布図	巻頭
第2図	坂尻遺跡周辺地形図	2
第3図	基本グリット配置図	6
第4図	試掘グリット土層柱状図	7
第5図	主要グリット平面図及び断面図	9
第6図	土層分布状況概念図	11
第7図	第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群、第Ⅳ群土器出土状況	17
第8図	第Ⅴ群、第Ⅵ群、第Ⅶ群土器出土状況	18
第9図	B、C区出土土器実測図	19
第10図	C、D区出土土器実測図	20
第11図	F区出土土器実測図	21
第12図	G、H区出土土器実測図	22
第13図	I、J区出土土器その他の遺物実測図	23

表 目 次

第1表	出土土器観察表	24
-----	---------	----

図 版 目 次

図版第1	坂尻遺跡周辺の地形
図版第2	坂尻遺跡遠景（西方より）、坂尻遺跡遠景（東方、掛川市原川より）
図版第3	西区南（B2、3、C2、3、D2、3区）グリット発掘状況 道路北半グリット発掘状況
図版第4	B3-3G南面セクション、D2-1G南面セクション、 D3-1G南面セクション
図版第5	H2-1G南面セクション、I3-2G南面セクション、 L2-1G南面セクション
図版第6	B3-1GⅡ層内遺物出土状況、H3-4G土器集中部、D3-1G柱穴状遺構



第1図 袋井市周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|-------------|
| (1) 寺島遺跡 | (7) 瀬戸山古墳 | (13) 金塚古墳 | (19) 国本遺跡 | (25) 長者平遺跡 |
| (2) 幡鎌遺跡 | (8) 和田岡原遺跡 | (14) 浅間山遺跡 | (20) 岡津原Ⅰ遺跡 | (26) 土橋遺跡 |
| (3) 長福寺遺跡 | (9) ひさご塚古墳 | (15) 浅間山古墳 | (21) 岡津原Ⅱ遺跡 | (27) 徳光遺跡 |
| (4) 本郷遺跡 | (10) 石原沢遺跡 | (16) 権現山古墳 | (22) 岡津八幡内古墳 | (28) 鶴松遺跡 |
| (5) 吉岡大塚古墳 | (11) 久野山遺跡 | (17) 宇佐八幡古墳 | (23) 向山遺跡 | (29) 観音堂横穴 |
| (6) 春林院古墳 | (12) 陳屋北遺跡 | (18) 坂尻遺跡 | (24) 地藏ヶ谷古墳群 | (30) 稻荷領家遺跡 |

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過

決定された路線内に2ヶ所、周知の遺跡が存在することは知られていたが、各遺跡が集落址であるため、遺跡範囲は明確にされていなかった。昭和53年度、路線内について再度、詳細な分布踏査が行われ、少くとも3遺跡が路線内に所在することが明らかとなった。確認された3遺跡を列記すると次のとおりである。

1. 石ノ形遺跡（坂尻遺跡）
2. 鳥居裏遺跡＝国本遺跡
3. 土橋遺跡

第1次調査は昭和56年度より実施する石ノ形遺跡（坂尻遺跡）第2次調査のための基礎資料（明確な遺跡範囲、遺跡の性格等）を得ることを目的として昭和55年12月18日～昭和56年3月31日まで実施された。また第1次調査の結果、路線内までひろがると考えられた石ノ形遺跡の範囲は北方丘陵上のみに限定され、路線内に所在する遺跡は石ノ形遺跡と連ならないことが明らかとなった。よって今後、本遺跡を付近の小字名をもって坂尻遺跡と呼び、隣接する石ノ形遺跡と区別して考えていきたいと思う。

第2節 地理的環境・歴史的環境

坂尻遺跡は、袋井市街地を約4km東進した掛川市と境界附近の静岡県袋井市国本173の1番地外一帯に分布している。遺跡のすぐ北側は、はるか赤石山脈より派生した丘陵が掌状に伸びてきている。また東は、隣接する掛川市北部の山々を源とする原野谷川が南流し、南の小笠丘陵にぶつかって西に大きく流れを変えている。この変換点あたりは、掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合流点でもある。

河川の周辺は肥沃な沖積平野で、砂層・泥層・礫層が交互に厚く堆積しており、上流の山地で一般に掛川層群と呼ばれる上部新第三系泥砂礫層からなる低地性丘陵を解折してきた結果である。

原野谷川中流域の古地形は、アシやヨシ等の低地性植物の繁茂する沼沢地が広がっていたと考えられる。原因としては、原野谷川や逆川の中小河川は水を集めて海に注ぐが、遠州灘の強い西風による砂丘や速い海流による砂州などで河川の流れはゆるんでしまう。そこで氾濫し易くなった河川の流域は池や沼を形成され、管鉄を多く含んだ層やピート層が多分に残っているのである。

坂尻遺跡付近では、基本的には砂礫層を基盤とした自然堤防と、粘土質土層を基盤とした後背湿地より成り立っている。自然堤防は古代より、集落や交通の要所となってきたが、北と南

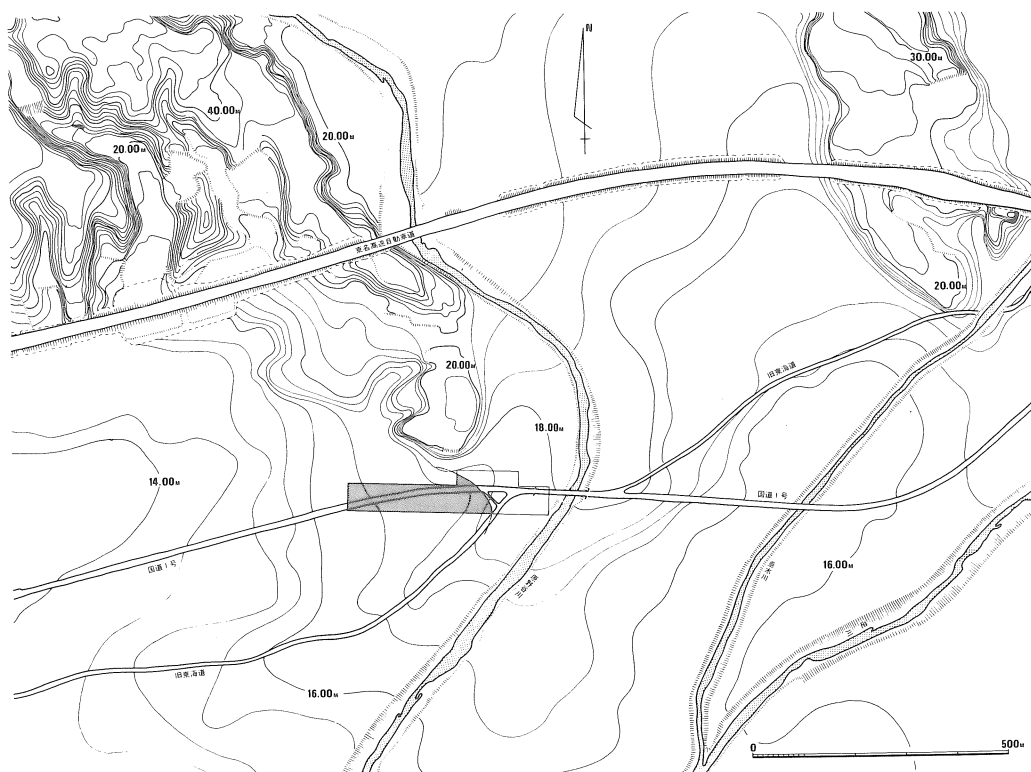
を山地で占められた坂尻遺跡附近も東西交通路として重要な意味合いを感じさせる。現在残る旧東海道は、原野谷川の自然堤防上を通っている。

これらの地理的要因より、坂尻遺跡は豊かな中遠平野を背景に長期間にわたって継続的に営まれていたと思われる。

流域に多くの恵みを与えながら南流する原野谷川の両岸には、縄文時代前期より各時代にわたっての多数の遺跡が営なまれている。

まず、縄文時代の遺跡は、原野谷川上流の掛川市原里地区に竪穴住居址と石匙・石錘・石斧・石鏃と多数の土器片を出土した荻ノ段遺跡（早・中期）をはじめとして、大縄遺跡・和田B遺跡（以上中期）、中瀬Ⅱ遺跡（晩期）等が流れを望む段丘上に散在している。原野谷川を下って掛川市原田、原谷、和田岡地区になると、遺跡の分布はやや希薄になり、寺島Ⅲ遺跡（中・後期）、幡鎌遺跡、本郷遺跡、瀬戸山遺跡（後期）、岡津原Ⅰ遺跡（後期）、陳屋北遺跡と両岸に点在している。

流域附近の弥生時代の遺跡としては、掛川市9ヶ所、袋井市10ヶ所であるが、全般的に土器片の採集程度で、発掘調査の実施された遺跡は少なくなっている。このうち、昭和51、52年に調査された袋井市国本の東山遺跡、久野山遺跡、浅間山遺跡では竪穴住居址、溝状遺構等と後期の土器が多数発掘されている。また原野谷川左岸の袋井市高尾にある狐塚遺跡では、竪穴住居址、方形周溝墓も検出されている。遺跡の立地としては、原野谷川を望む丘陵上またはその



第2図 坂尻遺跡周辺地形図

斜面に位置するものと、沖積平野に位置するものに分けられる。前者は上流域に多く、萩の段遺跡（中・後期）、長福寺遺跡（中・後期）、和田岡原遺跡（後期）等で、後者は中流域で梅橋遺跡、国本遺跡等がある。

和田岡の洪積台地上に位置する5世紀代の古墳は原野谷川流域で特色ある文化を見せている。各和・金塚古墳（全長60m、後円部径38.5m、高さ5.5m）、高田・ひさご塚古墳（全長63m、後円部径37.8m、高さ5m）、吉岡大塚古墳（全長55m、後円部径41.3m、高さ7.1m）の3基の前方後円墳と吉岡・春林院古墳（径30m、高さ5m）の円墳が中心的存在である。それについて、袋井市村松の石原沢1・2号墳、袋井市国本の宇佐八幡内1号墳、浅間山古墳、権間山古墳の30mクラスの前方後円墳と円墳が現われてくる。

古墳とともに、横穴墓も原野谷川、逆川流域では6世紀の中頃より築造が開始される。掛川市曾我・本村A横穴群、城山横穴、掛川市岡津A横穴がこれにあたり、掛川市本村B横穴群、下垂木・飛鳥横穴群、袋井市地藏ヶ谷横穴群、菅ヶ谷横穴群がつづいている。中遠地方の横穴墓総数約700基が数えられている。

奈良時代～平安時代にかけての遺跡は極端に少なく、袋井市内では山梨・稲荷領家遺跡で墨書土器、刀子、瓦等が採集されている程度である。そのため、坂尻遺跡は中遠地域でいまだ説明されていない奈良時代～平安時代の歴史を繙く重要な資料となっている。

第3節 発掘調査の経過

○1月23日より27日まで、現国道1号南側全域と、北側茶畑を除いた区域に調査基本杭と発掘グリットを設定した。発掘区画は30m×30mの正方形の区画を基準とし、北から1、2、3、西からA～Mと区画名をつけた。また発掘グリットは2m×2mの正方形で、基本的に15m間隔で設定した。グリット番号は、30m×30m区画内、西、北寄りから順に番号をつけ、区画とグリット番号を組合わせる事により、グリットに名称をつけた（例 1G-1G、3B-2G）。基本杭を打っている合間にも土器の小さな破片が、あちこちに落ちているのが確認された。グリットの設定とともに、発掘調査区の400分の1の図をつくり、グリットを書き入れていく事にした。

○1月28日からは、作業員10名も加わり、発掘作業が開始され現場が急に活気づく。簡単な自己紹介の後、各2名が1つのグループとなり、道路南側西のB3-1G、B3-2G、C3-3Gと作業は進められ、この日ベンチマークの設定も行われた。どのグリットからも、かなりの土器の破片が採集できた。この土器片は土師器と須恵器がほとんどで、奈良から平安時代にかけてのものと思われる。

○1月中に道路南側西の掘り下げは終わった。C3-3Gからは土製支脚がⅢ層内から出土し、C3-3G、D3-1Gでは住居と思われる遺構が同じくⅢ層内で確認された。南側西は比較的安定した層位状態を示した。（Ⅰa、b層—黒色有機質土層—Ⅱ層—Ⅲa層—Ⅲb層）

○1月31日の調査員、補助員会議でⅡ、Ⅲ層を古墳時代から奈良時代までの遺物包含層とする

ことで意見が一致した。

○2月に入り依然として寒い日が続き、遺跡内が田であるため、水分を含んだ耕作土が凍りつき、朝のうちは、くわやスコップを使うのに大変苦勞した。「シベリアに抑留されていた頃を思い出すよ。」とつぶやいた作業員の人の言葉が冷たい北風の中で妙に実感として聞えてきた。

○2月3日までに、作業は道路南側中央、東と一気に進められ、南区西の完掘されたグリットの断面及び全景の写真撮影もそれと並行して行われた。南側西から中央にかけての各グリットでは、基本的な層序（Ⅰa、b層—黒色有機質土層—Ⅱ層—Ⅲa、b層）を示すが、南側中央で黒色有機質土層はなくなり、各層位も少しづつ変化を見せている。また南側中央から東にかけては土器の出土量が減り、東ではほとんど発見されていない。写真撮影、図化を終えたグリットから埋め戻しにとりかかり、現場作業の休みの時や、雨の時を利用して、土器の洗浄作業やグラフ、図面の作成にとりかかった。H2—1GではⅢ層内より甕が出土、H3—4Gからはおびただしい量の須恵器、土師器が出土した。H3—4Gについて結論は第2次調査へ持ちこし、写真撮影、実測図作成後、現状維持の形で埋め戻した。南側東の各グリットの土層は砂質強く、砂層、粘土層、砂礫層が細かく堆積しているので、旧河道と考えた。

○2月12日から14日まで、道路北側の盛土部分の除去作業をユンボにより行なった。またユンボの作業進行にあわせ、調査基本杭、グリットの設定を行なった。

○2月16日から道路北側中央のG2—2Gから西へ掘り進み、B2—1Gまで行ったところでH2—3Gより東のグリット4ヶ所を26日までに掘りあげた。この期間雨が多く、仕事は思うようにはかどらずポンプによる排水が続いた。F2—3Gは排水後、見ている間に壁が崩れ始め、危険であるため断面図作成を断念、簡単なメモをとり急遽埋め戻したが、非常に残念な出来事だった。

○2月18日、墨書土器がC2—2Gより出土。浜松市博物館の向坂さんより『日根口』と読めそうだ。人名だろう。」と知らされ、今度の発掘の大きなげみとなった。

○2月24日から27日まで道路北側西、中央の各グリット、東の一部グリットの写真撮影、実測図作成。F2—4G、F2—5Gでは住居址と考えられる炭化物と、土器を多量に含む黒色有機質土層が確認されB2—1Gでも遺構の確認ができた。2月25日から3日間、粉雪が舞い、一日中氷も解けない寒波の中、凍った土の埋め戻し、氷の上での図面取りと仕事は本当にきびしかったが、互いに寒さを気づかって仕事をした事と、休憩時間に飲んだ熱いお茶のおいしさは、同じ思いをした者にだけ通い合う心であり、発掘という共同作業を進める上で大切な事だと思った。

○2月29日、調査員 補助員会議。

○3月2日、午後雨も上がり道路北側東の一部グリットを排水後、埋め戻す。

○3月10日、道路北側東4ヶ所（K2—1GからM2—1G）と南側にグリット設定。ベンチマークも設定し、発掘作業を継続する。この区域は遺跡からはずれているのか、土器はほとんど見られない。L3—1Gで旧河川を思わせる砂礫層と砂層の堆積が見られた。

○3月17日で現場作業終了。

○3月18日より、3月14日の調査員、補助員会議で決めた室内作業分担にわかれて、図面、写真の整理、土器等出土遺物の整理など、まとめの作業にかかり、3月31日をもって第1次調査は終了した。

今度の発掘調査で思ったことは、発掘という仕事の内容さえ知らない人が、発掘調査を始め、日がたつに従って、「鎌倉時代は今から何年まえか…」「平安時代と奈良時代はどちらが先か？」「ボクシヨ土器ってなんだ。どんな字が書いてあって、どういう意味か？」などと、いろいろな質問がとび出すようになり、興味が深くなっていく様子がわかった。第2次調査のように長い発掘となる場合には、こうしたみんなの心を大切に、時々簡単な説明会をひらき、調査員、補助員、作業員全員が、自己の責任のもとに発掘を進めているという自覚をもって仕事ができたら、仕事を大切にするであろうし、またよりよい仕事を進めることができるであろうと感じ、そんな職場にしたいと願いました。

第2章 遺 跡

第1節 土 層・遺 構

坂尻遺跡は、原野谷川右岸の低湿平野に位置するため基本的には、砂層・泥層・礫層が交互に重なっている。今回の試掘で確認された表土下約1mまでの土層は、〔Ⅰa層〕一暗灰色粘土層〔Ⅰb層〕一管鉄混り灰色粘土層、〔Ⅱ〕一灰色粘土層（若干の礫を含む）、〔Ⅲa層〕一暗褐色粘土層（有機）、〔Ⅲb層〕一暗褐色粘土（弱有機質）の5層に大別された。このうちⅠa、Ⅰb層はいわゆる耕作土で、遺物包含層はⅡ層、Ⅲa層、Ⅲb層である。包含層では古墳時代、奈良末～平安時代にかけての土師器・須恵器が出土している。

（A）全体土層の観察

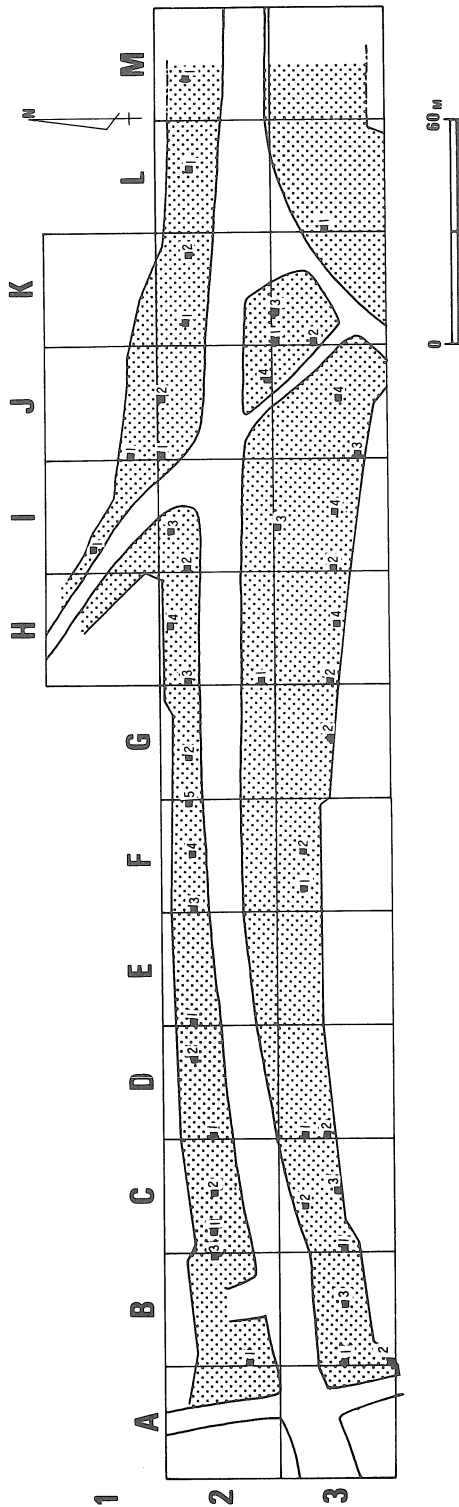
試掘調査区は、国道1号線に沿って東西約350m、南北約70mの範囲で、西は厚いシルト層が、東は原野谷川の影響で砂レキの多い土層堆積となっている。

Ⅰa層の分布範囲

今回調査されたすべてのトレンチより検出されている。一般に表土と呼ばれている土で、水田、畑地では耕作土である。水田、畑地の植性により土の質は若干異なるが、ベースとなる土は基本的に同一の暗灰色粘土層である。

Ⅰb層の分布範囲

Ⅰb層となるかん鉄混じり灰色粘土層は水田の床土にあたる。基本層は灰色粘土層であるか、水田耕作中または沼沢地状になっている時、かん鉄の沈でんが見られ本層のように変化した。分布範囲は旧原野谷川流路推定域を除くほぼ全部である。現在水田でなく茶畑となっている地区の場合は、茶畑を作るさいに水田面に盛土をしたためである。



第3図 基本グリット配置図

黒色粘土層の分布範囲

黒色粘土層は(株)児玉化学正門より西側の、西北区、西南区はほぼ全域に分布している。分布東限はE 2-1 Gである。西限は今回調査区の土層の中では切れず、さらに広がると考えられる。

II 層の分布範囲

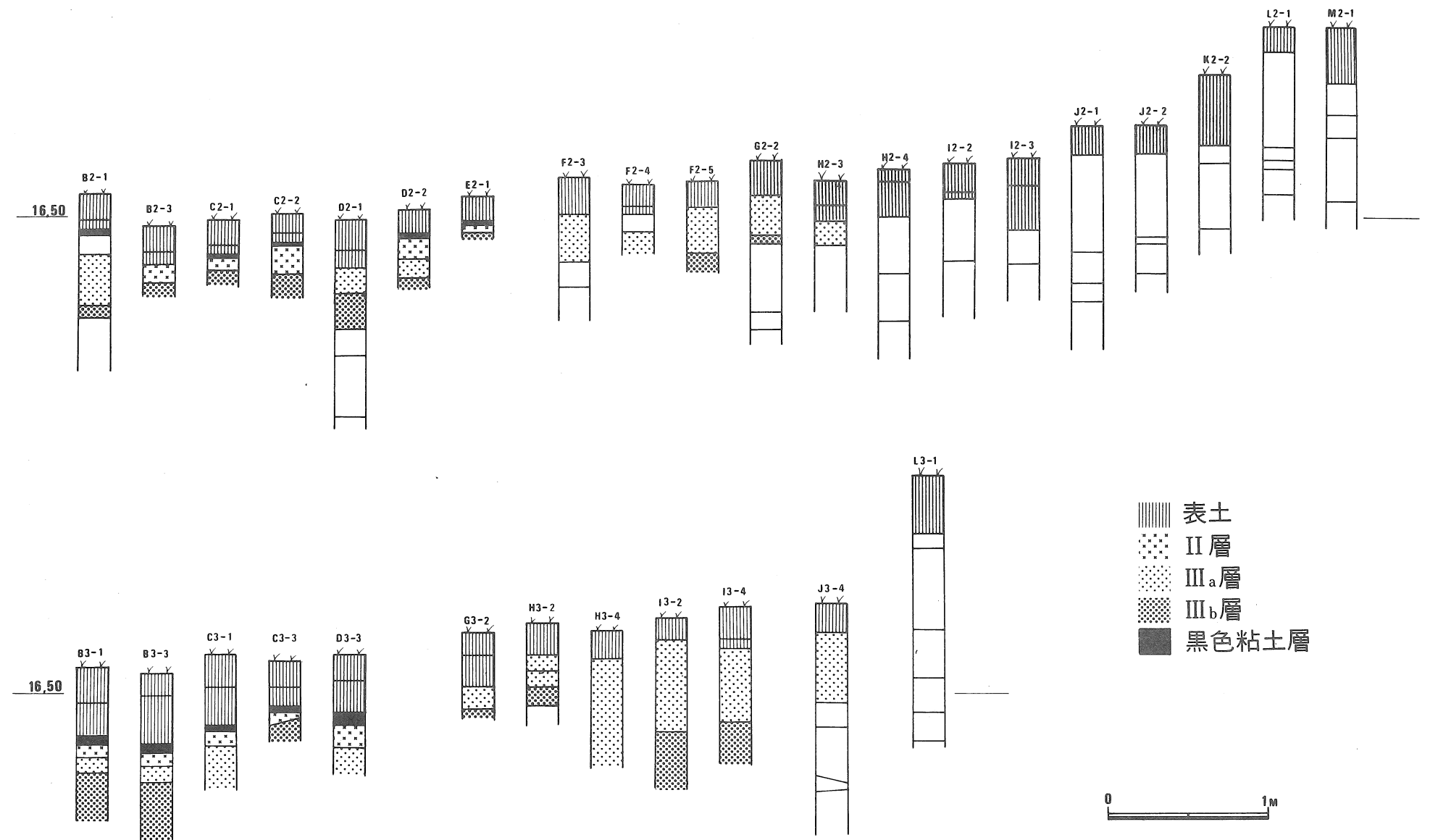
K 2-1 G、K 2-2 G、L 3-1 G、やH 2-4 G、H 3-2 G、I 2-2 G、I 2-3 GそしてB~Fのグリットはほぼ全域に堆積が見られる。この堆積はさらに西南に伸びて、原野谷川の河道に添っていると思われる。この灰色粘土層は、原野谷川が自然堤防を越えて氾濫した土でレベルの高い東側では部分的に残土していると考えられる。

III a 層の分布範囲 (第6図のA)

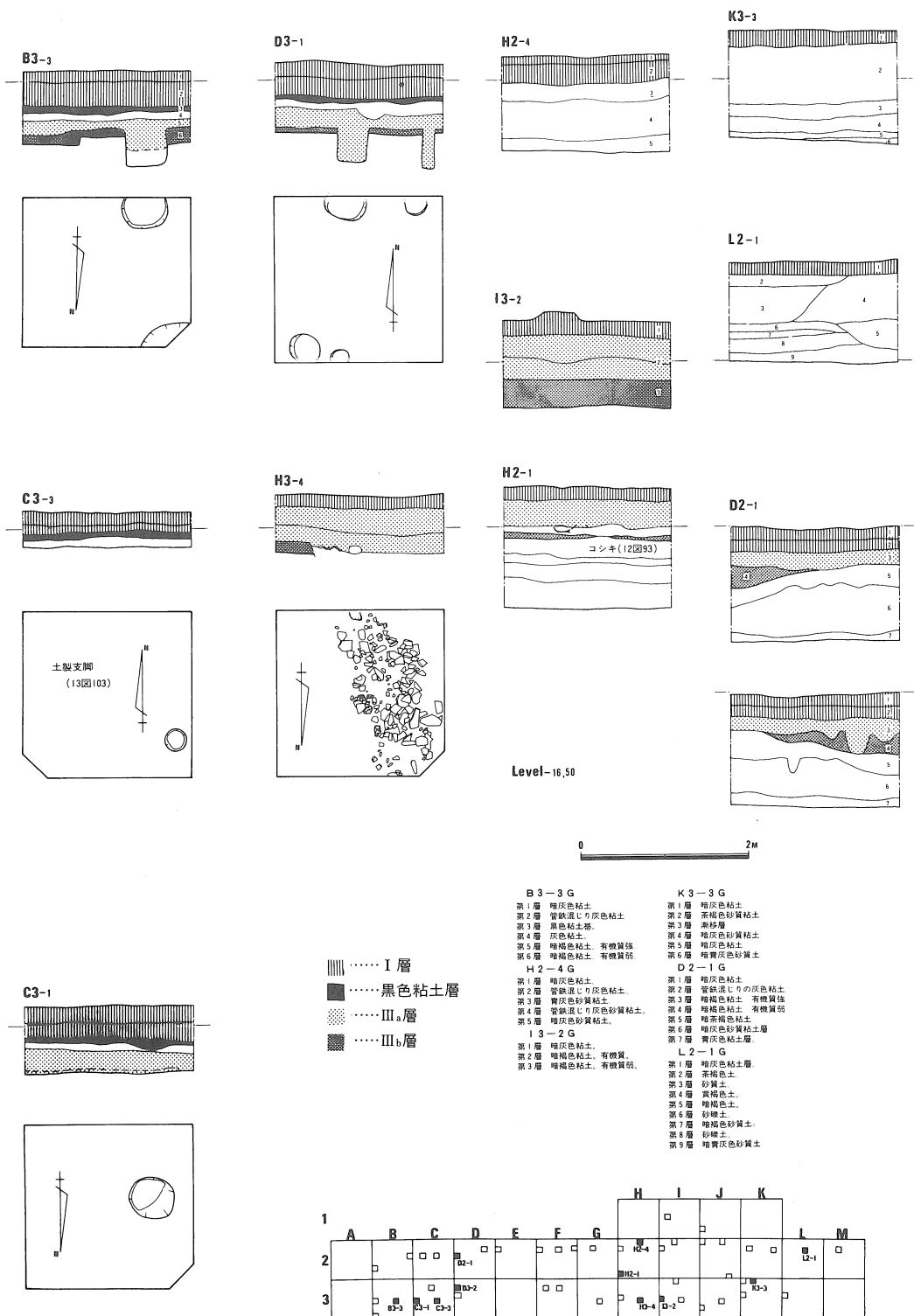
東限は2 H-3 G、3 I-3 G、3 K-2 Gを結んだラインまでである。これは遺物出土状態の範囲と重複している。III a 層は暗褐色有機質土でやや有機質が弱い土であり、いわゆる後背湿地の内に入ってくる。一般的傾向として、東へゆくほど原野谷川の影響で砂質が増加し、西側ではやや減る傾向にある。III a 層の広がりの中で部分的にグリットで確認されていない地区があるが(B・F区)これは溝等の遺構にかかっていると思われる。

III b 層の分布範囲 (第6図のB)

III b 層は有機質の強い暗褐色有機質土でIII a 層とはほぼ同じ分布範囲をとる。東は2 G-2 G、2 H-1 G、3 I-3 Gの各グリットを結んだラインまでを限界とする。西は、今回調査した範囲よりさらに西方へ続くことは確実である。2 F



第4図 試掘グリット土層柱状図



第5図 主要グリット平面図及び断面図 (1/80)

区内、3F区内で部分的にⅢb層が未確認であるが、これは上層のⅢa層の分布範囲と考え合せて、溝状の遺構が本地区を南北に縦断していると思われる。

以上、各層の分布範囲を示したが、坂尻遺跡全体の土層堆積状況については第4図の土層柱状図に示したとおりである。

(B) 代表的土層の観察

試掘調査区の土層観察の結果、中小河川の流域における一般例として遺跡内は大きく三つの堆積が見られる。調査区西側の後背湿地内(B3-3G、D2-1G)、調査区中央附近の自然堤防から後背湿地に漸移的に移る部分(H2-4G、I3-2G)、調査区東側の自然堤防にかかる部分(L2-1G、K3-3G)に大別される。各グリットの土層堆積状況は第5図、代表グリット断面図に示した。

今回の調査では遺跡の範囲確認を主体におき、断面の観察を中心に発掘した。遺構は平面と断面での確認が併記してある。遺構確認グリットは次のとおりである。

土器集中地点 H3-4G (下に溝状遺構を伴う)

溝状遺構 H2-1G、I3-3G

Pit B3-3G、C3-1G、C3-3G、D3-1G、D3-2G、
D2-1G、D2-2G

落ち込み D3-1G、F2-4G、G3-2G、H3-2G、J1-1G

この中で代表的なグリットは次のとおりである。

H3-4G (土器集中地点)

土器集中地点は表土下約60cmのⅢa層の中より検出される。グリット南面セクションではⅢb層の立ち上りも見られる。確認範囲は、南北はグリット両壁まで、東西はグリットやや西寄りに幅約50cmで集中している。集中している土器は須恵器が中心で、大甕口縁、坏類等、器種は雑多である。また土師器の含まれる割合もかなり多く、拳大の礫もかなり混っている。須恵器・土師器および礫の集中状態から、これらは南北に流れる溝状遺構に投棄されたと考えられる。坂尻遺跡の中で、重要な遺構となることを考え、記録後現状のまま埋め戻す。詳細は本調査にゆずる。

B3-3G

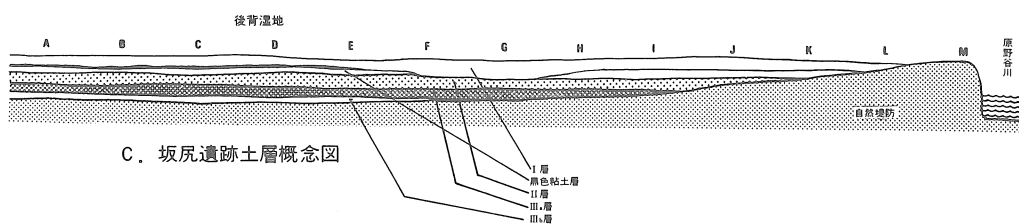
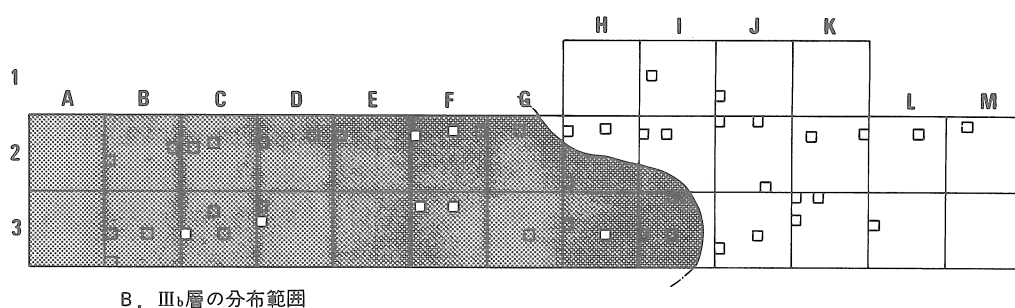
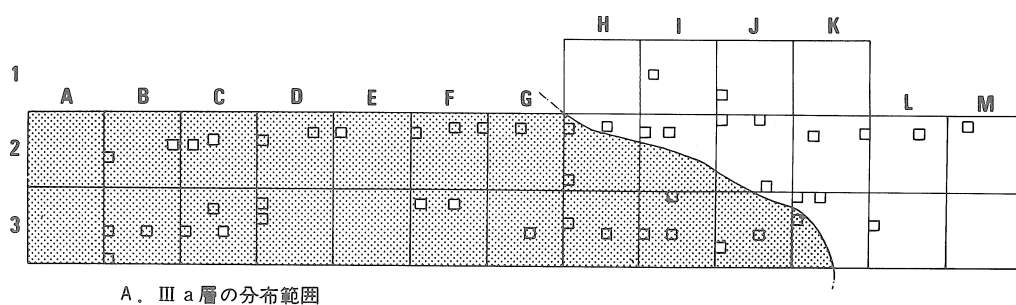
グリット内よりPitを2つ検出している。PitはⅢa層より掘り込まれており、直径50cm、深さ40cmを計る。柱根は確認されていないが、掘立柱建築物の一部または竪穴住居址の柱穴がかかっていると思われる。

C3-1G

直径約50cm、深さ16cmを計るPit1を検出している。掘り込み面はⅢa層内と思われる。掘立柱建築物の一部と考えられる。

C3-3G

表土下約40cmより柱穴、土製支脚が検出されている。柱穴の直径約26cm、深さ27cmを計る。竪穴住居址の床面と考えられる。



第6図 土層分布状況概念図

D3-1G

Pit 4つが検出されている。Ⅲ a 層内より掘り込まれⅢ b 層に達している。直径 20cm～50cm、深さ24cm～42cmを計測する。掘立柱建物または住居址柱穴と思われる。

H2-1G

表土下約 50cm より甕が出土している。その附近を精査した結果、堅穴住居址または溝状遺構のたち上りが検出された。Ⅲ a 層より掘り込まれている。

以上の結果より、予想される遺構としては奈良末～平安時代にかけての掘立柱建築物、柵等を中心とした官衙遺構及び、古墳時代の数軒の堅穴住居址からなる小集落の存在が推定されてくる。

第2節 出土遺物

i) 土 器

第1次調査で出土した土器の総量は、25cm×36cmのポリ袋に入れた状態で81袋である。本調査の目的が、昭和56年度より実施する第2次調査（平面調査）のための基礎的な資料集め、特に遺跡の範囲確認に置かれたため、各試掘グリット間で、その掘り下げる深さに差が生じた。これは顕著な土器の集合が見られたり（遺物の出土状態）、柱穴、溝、土壇あるいは堅穴住居等、何らかの遺構の存在が想定されるような土層の変化が確認された場合（包含層の保存状況）、第2次調査を意識して、その時点で、多くの試掘グリットで掘り下げを中止したためによる。土器についていえば、第1次調査の目的に必要なかぎり、原位置にとどめ、取り上げることをひかえた。よって本調査出土の土器は、ほとんどが破片であり完形品はわずかである。以上のような第1次調査が持つ制約の中で採集された土器片を、できうるかぎり図化し、現地での土器の観察をたよりに、後述するような分類、操作を行なった。発掘資料をあつかう上での基本的なあやまりやいきすぎがあるかもしれないことを、まずことわっておきたい。

土器は古墳時代中期後半から近世まで大きな時代的幅を持って出土している。そのほとんどは須恵器と土師器で、ついで灰釉陶器の出土量が多い。少量ながら中、近世の陶質土器も見られる。総出土量に占める土師器の割合は約50%、須恵器約45%、灰釉陶器等約5%である。土師器はすこぶる保存状態がわるく、取り上げたもののほとんどが器表剝離し、調整痕等確認できるものは少い。時代別に7群に別けることができる。

第Ⅰ群土器

B 3 区小礫の混ったⅢ a 層中より出土した坏蓋（9-1）高坏坏部（9-15）甕口縁部（9-23、24、25）がこの群に属する。須恵器坏蓋は器高が高く、天井部を幅広くヘラ削りし、天井部と体部の境に明瞭な稜をつくりだしたもので、遠江編年Ⅱ期（遠江研、1966）に属する須恵器と考えられる。第Ⅰ群土器の出土は、B 3 区等工事予定地西部域に限られ、出土する範囲は狭い。5世紀後半代の土器を第Ⅰ群とした。

第Ⅱ群土器

B区からH区まで、かなり広い範囲で出土するが、B区を中心とした西部域とG区周辺で出土量が多い。F3-1GではⅢa層中より出土する土器片の約50%が、第Ⅱ群に属するものと思われる。須恵器坏身には遠江編年Ⅲ期中葉に属するもの(12-86)とⅢ期後半に属するもの(9-6)、坏蓋には扁平であるがするどい稜を有するⅢ期初頭(12-85)とⅢ期後半に属するもの(9-2)がある。土師器坏身には体部から口縁部が内方へ屈曲するもの(9-11、13)直立して断面三角形を呈するもの(9-10)外にひらくもの(9-9)碗状を呈するもの(9-28、29、10-48、11-61)等がある。第Ⅱ群に属すると思われる土師器の器種は多く、高坏(9-17、18、10-49、11-62)甕(9-26、27、10-50)甗(9-30、12-93、94)厚く外に張った脚を有する盤(鉢)(11-63)壺底部(9-20)等がある。胎土は茶褐色砂粒を混入しているものの、比較的ちみつで均一である。西部域では小礫の混ったⅡ層中からも出土するが、Ⅲa層中からの出土が一般的である。B3-2Gより出土した斜格子目文様を有する壺肩部片(9-19)は、共伴した坏、高坏脚から第Ⅱ群と考えた。第Ⅱ群土器の年代幅を、6世紀代に比定している。

第Ⅲ群土器

相対的な出土量は少ない。B3区からH3区にかけてのⅡ、Ⅲa層中より出土する。道路北側ではC区をのぞき第Ⅲ群土器は見られない。分布域は第Ⅱ群土器とはほぼ重複するものと思われる。図化できた資料はすべて須恵器である。土師器については判別できなかった。坏蓋(9-3、4、10-43)坏身(11-55、56)長頸壺(9-22、11-72)平瓶(11-73)高坏(12-90)甕(9-21)等がある。坏身、蓋以外の器種には、第Ⅲ群に属すると考えがたいものも含まれているが、各グリットから出土する各群土器の相対量を参考に、第Ⅲ群と判断した。口径が小さく(9~11cm)著しく立ちあがり内傾する坏、身受けを有する坏蓋を指標として、第Ⅲ群土器の年代幅を7世約初頭から7世約中葉に比定している。

第Ⅳ群土器

相対的な出土量は少ない。これは出土遺物中、坏身、蓋をのぞき第Ⅴ群と明確に区別できる器種が出土していないため、第Ⅴ群とした土器の中に第Ⅳ群に属するものも多く含まれていると考えている。あえて第Ⅳ群を分けたのは、須恵器坏身、蓋で見るかぎり、第Ⅳ群の分布域が第Ⅴ群に比べ、かなり西方におしやられ、狭まっているように思われるからである。第Ⅳ群土器はB区からG区にかけてのⅡ、Ⅲa層中より出土し、坏蓋は器高が高く、比較的大型で扁平な宝珠形つまみを有し、体部に顕著なノタ目を残している。特にD2区での出土量は顕著である(9-5、10-31、44)。坏身はすべて高台を有し(10-46、11-57、12-77)うち底部が高台より下方に張り出すもの(10-46)は伊場遺跡大溝、第Ⅴc層より出土した土器と同形態のものである(浜松市遺跡調査会 1971)。この種の須恵器坏は藤原宮では使用されているが平城京ではその使用が一般的でないとのことである。7世紀末から8世紀中葉に比定できる土器を第Ⅳ群とした。

第Ⅴ群土器

各群土器と比べ、出土量は多く、須恵器についていえば、出土土器の50%を越えているよう

に思われる。土師器についても、総出土量の3分の1を越えている。B区からI区まで確実に分布域はひろがり、Ⅱ、Ⅲa層中より出土する。特にC区からI区にかけてのⅢa層中より顕著な出土量を示す。Ⅲb層中のかなり下層からも出土することがあり、一見第V群土器は広く、厚く分布しているように思われる。出土レベルに大きな差が見られるのは、第2章第1節で述べた柱穴、溝等の多くが、この時期に属する遺構であるからかもしれない。須恵器坏身には高台を有するもの(10-45、47)と有さないもの(10-35、36、12-88)がある。高台接合部、底部外周をへう削りにより調整し、明確な稜を持たない点で共通している。底部に「日根口」と墨書した坏身(13-109)は第V群に属すると思われる。坏蓋は扁平となり、宝珠形つまみが、口径に比して小さく、高くなるもの(10-32、12-76、87)を第V群とした。坏蓋には口径の大きなものと小さなものの2形態がある。他に盤(11-59) 甕(12-81) 長頸壺(12-95、96)が第V群に属すると思われる。土師器では甕の出土量が多い。第Ⅱ群の土師器と同様、保存状態は悪く、器表剥落し、調整痕を明確に知ることのできるものは少い。胎土中に茶褐色粒が見られるものもあるが、非常に細い白石砂、雲母粒を含んでいる。第Ⅱ群土器の胎土に比べ、よりちみつで均一に見える。甕は特徴的な口頸部を有している。それは口縁を頸部から外上方にひきのばし、その端部を若干つまみあげて、ゆるく上方に屈曲させるというもので、なかには、口頸部が「□」状にひらいて口縁部がほとんど水平になるもの(12-91、92)がある。この口頸部が「□」状を呈するものと、口縁部がそこまでひらかず、外上方にのびるもの(10-51、11-65、66)との間には、時間的な差があるものと考えている。胴底部の形態は不明である。坏については底体部境に丸味をもち、口縁部が外上方もしくは上方にのび、口縁部ヨコナデ調整をしているもの(9-14、12-78、89)を第V群とした。他に壺(12-80、84) 皿(12-79)が第V群に属すると思われる。第V群土器の年代幅を8世紀後半代に比定している。

第VI群土器

相対的な出土量は少い。表土、Ⅱ、Ⅲa層中より出土する。分布域は第V群よりさらに東方に広がると思われる。

体部が深い皿状を呈し、高台接合部を回転ナデ調整する低い高台を有するもの(9-7、11-58、13-97、98、99)を第VI群とした。底部に回転糸切り痕を残すもの、また灰釉をかけたものがある。第VI群土器の年代幅を9世紀から10世紀代に比定している。

第VII群土器

出土層位、分布域とも、第VI群土器と同一である。粗雑なつくりのひしゃげた高台に靱痕を有する山茶碗(10-38)など、中世以降の土器を第VII群とした。

第I群から第VII群土器の出土グリットを示したのが第7、8図である。J3-3、4Gからも第V、VI、VII群に属すると思われる土器片が出土しているが、第7、8図は、図化できた資料のみで作成したため、図示していない。しかし第VI、VII群土器についていえば、確実に分布域をJ3区まで拡大すると思われる。

各群の相対的な出土土器量をみると、第V群土器が最も広範に密度高く分布し、ついで第Ⅱ

群土器の出土量が顕著である。

第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群土器の分布域は第Ⅱ、Ⅲ群土器がF、H区で出土するが、密度の高い分布域はA区からD区までと、ほぼ重複している。つまり、古墳時代に属する土器の出土は西部域で顕著である。第Ⅳ群土器はB区からG区にかけて出土し、第Ⅴ群土器はC区からI区にかけて、高い密度で、普遍的な出土を示す。第Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ群土器の密度の高い分布域を第8図-4に図示した。

ii) その他の遺物

第1次調査において出土した土器以外の遺物は、土製支脚(2)、土師馬の脚部(2)、砥石(1)、剣形石製模造品(1)である。土製支脚、土師馬の方量、形態は土器観察表で示したものであり、ここでその分布をみると、土製支脚はB、D区と西部域に集中し、土師馬に関してはB、G区と離れて出土しており、頭胴部は欠損している。剣形石製模造品は調査に先がけての表面採集で見つけたものであり、区画で言えば、道路南側のF区とG区の境あたりである。石質はカンラン岩で、方量は $4.8 \times 2.9\text{cm}$ 、厚さ 0.8cm であり、全面に研磨を施し、基部に穴を有する。

第3章 ま と め

第1次調査の内容については、以上各節で述べてきたとおりであるが、現地調査中、また後に発掘調査に従事した人々の間で話しあわれた点を2、3つけ加えることでまとめにかえたいと思う。

i) 遺跡の限界について

遺物はB区からJ区にかけて出土し、遺物包含層と考えられるⅡ、Ⅲ層の堆積はJ区より東方において明確に知ることができない。またⅠ-Ⅰ区では、非常にかたい砂層(丘陵裾)が地表直下に見られ、J区以東の各グリット層位断面が示す、不規則な粘土層と砂礫層の互層形成状態は、東部域が旧河道であったことを想像させる。坂尻遺跡は河道を変え、西流し始める原野谷川の内側に形成された微高地上、海拔 16.00m から 17.50m にかけての緩傾斜地に営まれた遺跡と考えられる。工事区域内についていえば、遺跡東限は、Ⅰ区付近と思われ、西限はA区よりさらに西方にひろがり、第1次調査では確認できなかった。遺跡面積は、名北地区工事区域内約 8000m^2 をしめている。

ii) 遺構、遺物の残存状態について

遺物包含層(Ⅱ、Ⅲa b層)は遺跡範囲内、平均約 60cm の厚さで堆積しており、この包含層内に確認できた遺構は、少くとも2種以上の残存状態を示している。一つはⅡ層を覆土とする遺構であり、一つはⅢa層がⅢb層内に落ち込むか、Ⅲb層を貫ぬいてⅢb層下の粘土層にまで達している遺構である。Ⅲa層を主要な覆土とする遺構のなかには、その覆土の有機粒子量からⅢb層の落ち込みと考えるべき遺構も含まれている。また西部域で広範に堆積する黒色有

機質土のⅡ、Ⅲ層内への落ち込みも確認されており、遺構覆土でみるかぎり、残存する遺構は数時代にわたり、密度高く非常に複雑に重複している。遺物については第2章で述べたごとく6世紀代のもの（第Ⅱ群土器）と8世紀代のもの（第Ⅳ、Ⅴ群土器）が出土遺物の大半をしめているが、包含層内における、その出土層位は明確に区分できず、Ⅱ、Ⅲ層内に5世紀後半から中世近世にいたる遺物が混在している状態である。出土遺物と包含層の関係については、第2次調査において明らかにしていきたいと思う。

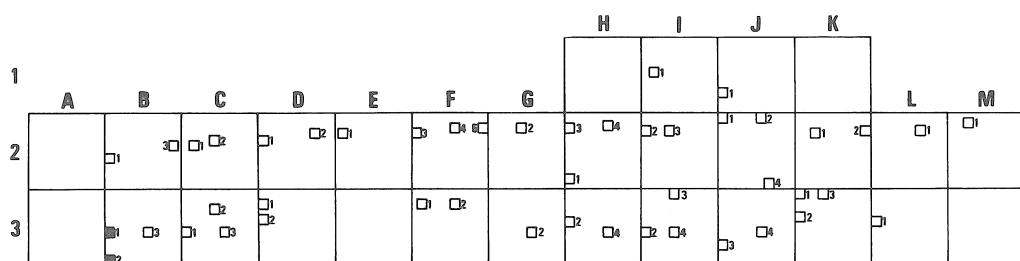
iii) 遺跡の性格について

ばくぜんと「集落址」と考えているが、8世紀代の遺物中、須恵器のしめる割合は大きく、器種に盤皿が見られるなど、坂尻遺跡を単なる「集落址」と考えがたい遺物もかなりの量出土している。つまり墨書土器の存在や、掘立柱建築遺構群を推定させる遺構のあり方は、8世紀代についていえば、官衙址的要素がきわめて強いことを示している。

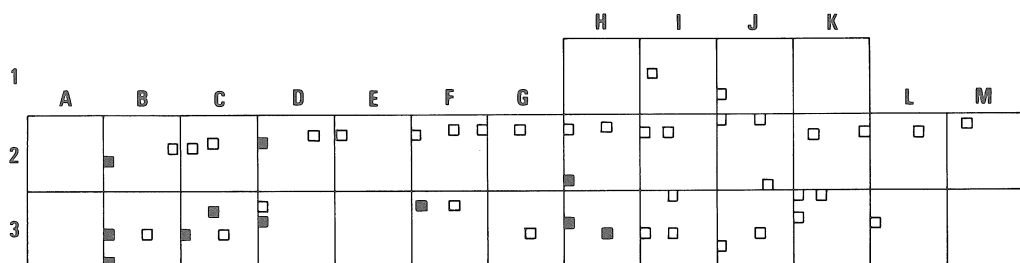
本稿執筆にあたり、いつものことであるが、浜松市博物館の向坂鋼二さんより多くの助言を得た。また出土土器の整理にあたって、同じく浜松市博物館の川江秀孝さんには、骨味おしまぬ協力と指導を得た。文末ではありますが、ここに記して深く感謝いたします。

参考 参考文献

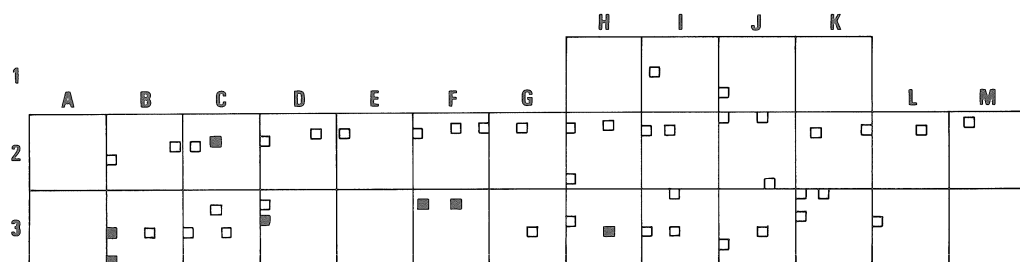
1. 1966. 遠江考古学研究会「大沢・川尻古窯跡調査報告書」
2. 1971. 静岡県教育委員会「掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告」
3. 1971. 浜松市遺跡調査会「伊場」第4次調査月報2
4. 1974. 静岡県 「静岡県の地質」
5. 1979. 静岡県教育委員会「静岡県遺跡地名表」



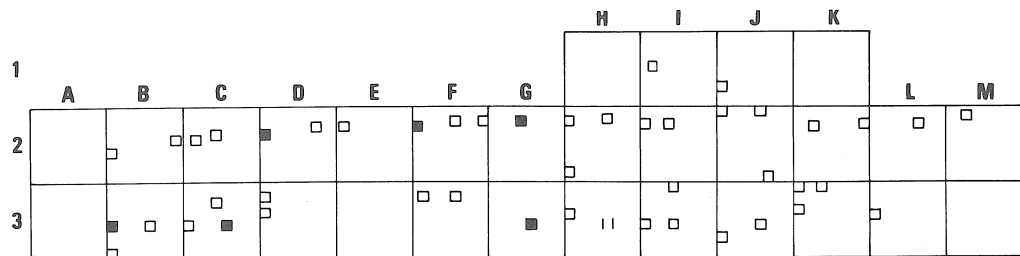
第I群土器出土状況



第II群土器出土状況

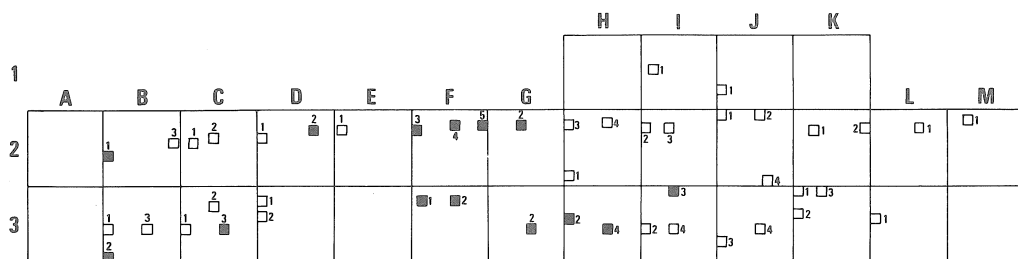


第III群土器出土状況

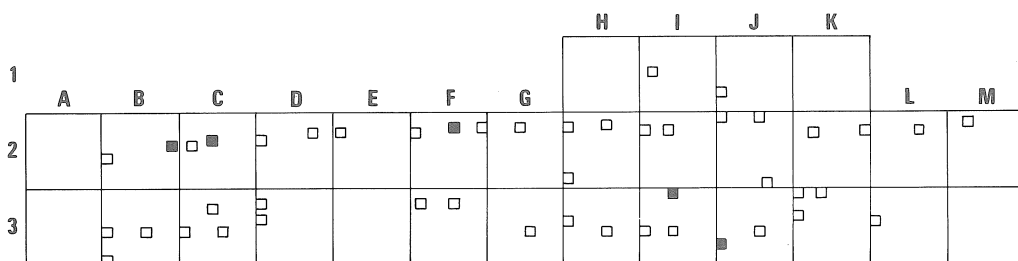


第IV群土器出土状況

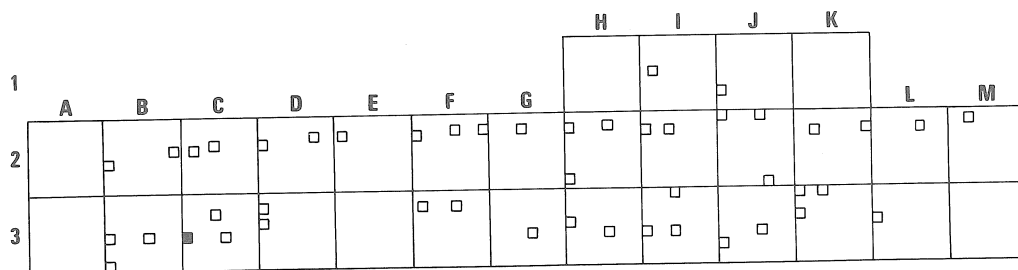
第7図 第I群、第II群、第III群、第IV群土器出土状況



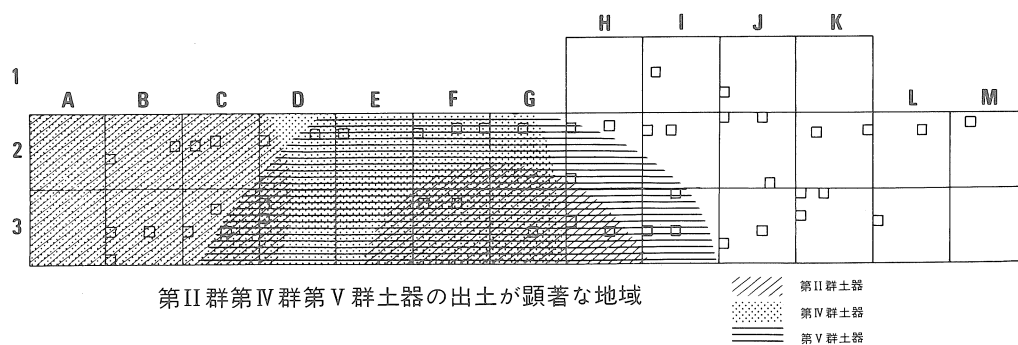
第V群土器出土状況



第VI群土器出土状況

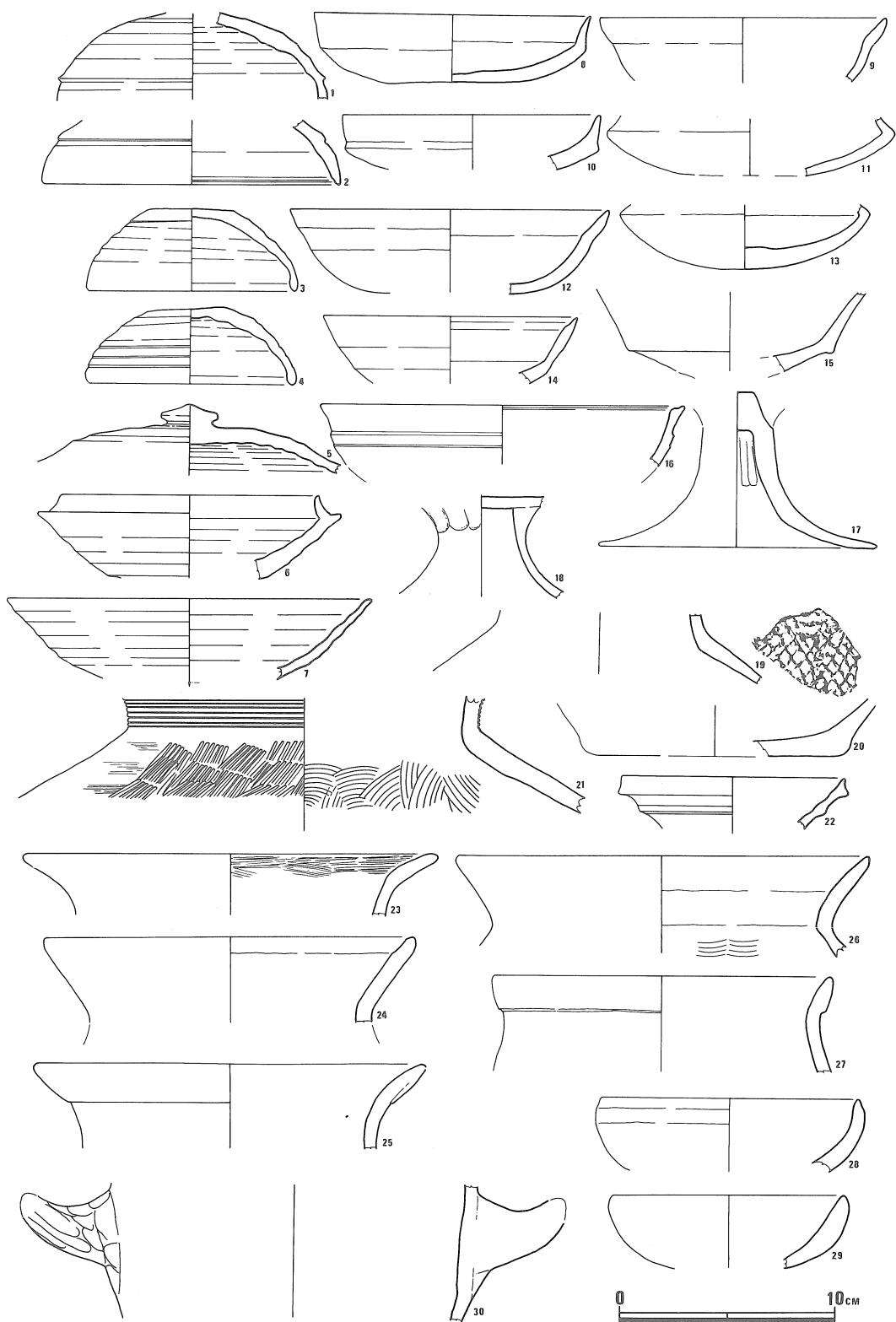


第VII群土器出土状況

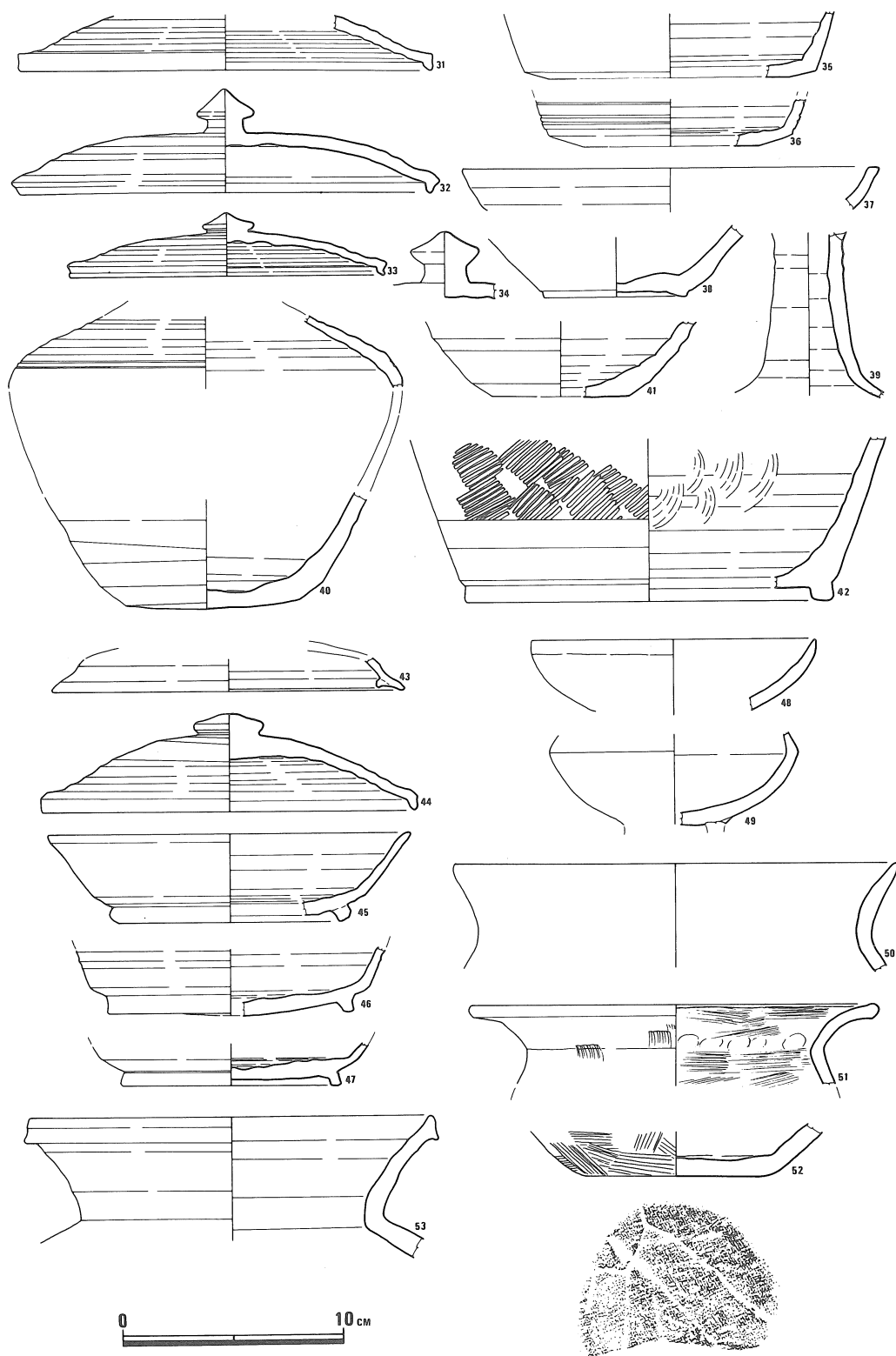


第II群第IV群第V群土器の出土が顕著な地域

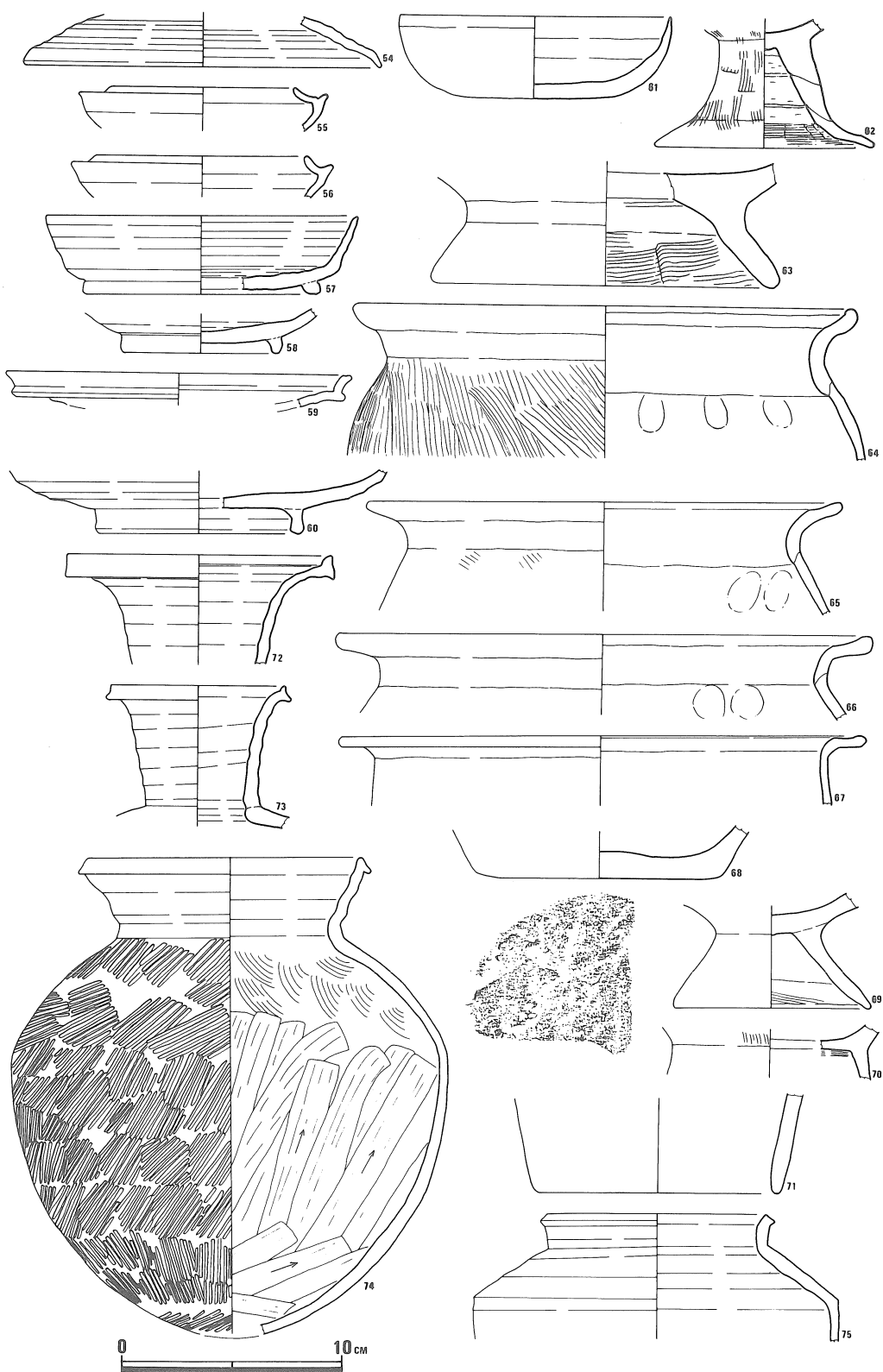
第8図 第V群、第VI群、第VII群土器出土状況



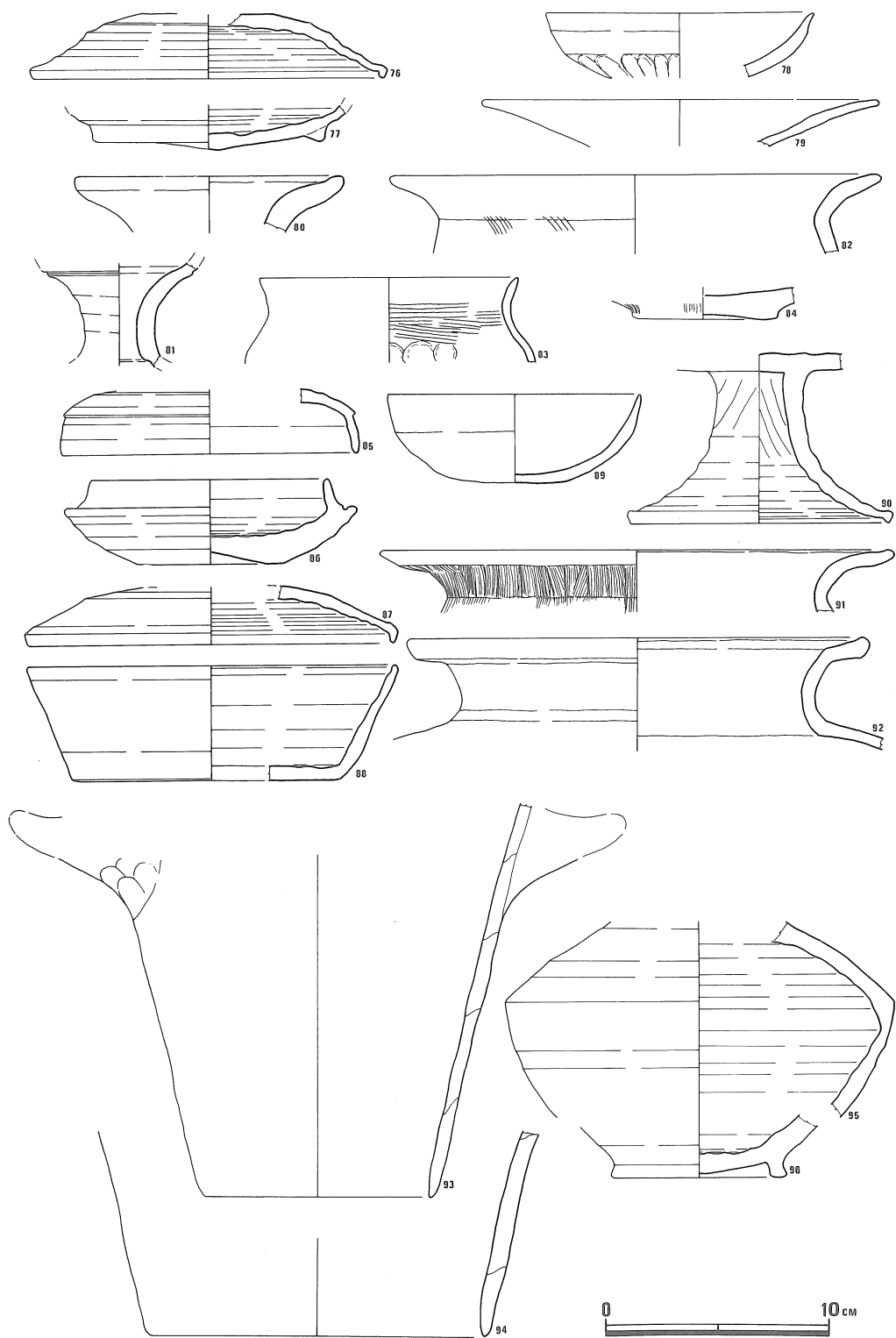
第9图 B、C区出土土器实测图



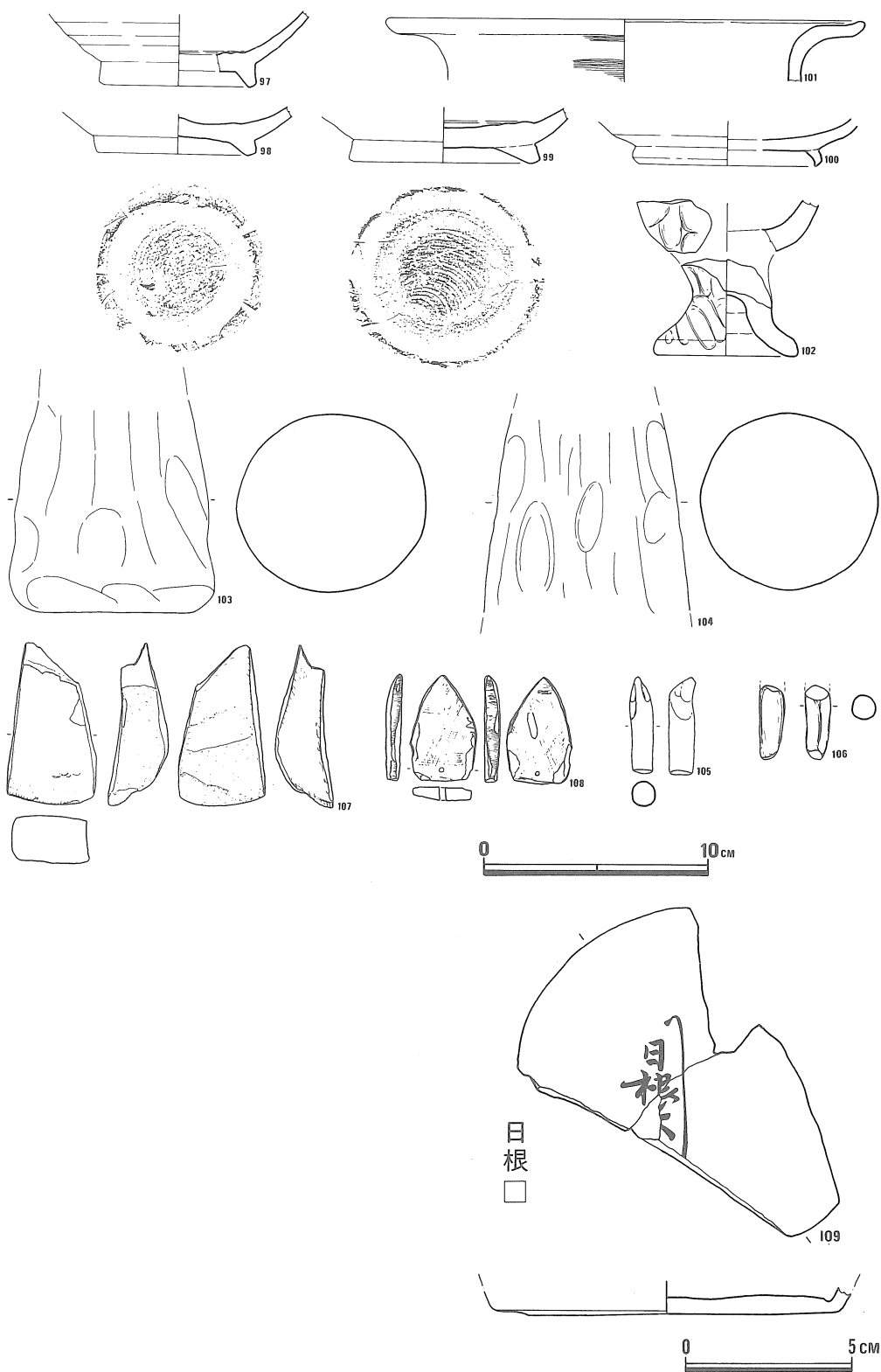
第10图 C、D区出土土器实测图



第11图 F区出土土器实测图



第12图 G、H区出土土器实测图



第13図 I、J区出土土器その他遺物実測図

第1表 出土土器観察表

器形 (分類群)	挿入番号等	口径 最大径 器高	形態	技法	胎色	土成	備考
環蓋 (S-I)	9-1 B3-2-004 132-1	— — —	天井部と口縁部の間に稜がある。口縁部は内丸なし。わずかに外にひらく。稜線部は比へ口徑が大きいと思われる。	天井部約1/2をへう削り、他は回転ナデ調整。	白色砂混入 良 暗灰色	均一ちみつ	ロクロ=時計まわり(天井部)
環蓋 (S-II)	9-2 B3-1-004 128-1	13.75 — —	天井部と口縁部の間に稜はあまなく、稜線下一条花線をあぐくする。口縁部内丸なし。外にひらき、端部内面に一条花線をめぐらす。	天井部、口縁部内外面回転ナデ調整。	黒色粒混入 良 暗灰色	—	残存率1/2
環蓋 (S-III)	9-3 B3-2-005 131-1	9.8 — 3.85	天井部凹凸少ない。口縁部は内丸なし。つやや外にひらく。口縁部若干厚みを増し丸味を持つ。	天井部約1/2(頂部のみ)へう削り。天井部、口縁部内外面回転ナデ調整。	白色砂、黒色粒混入 良 灰白色	ちみつ	ロクロ=逆時計まわり(天井部、口縁部)
環蓋 (S-III)	9-4 B3-2-005 131-2	9.8 — 3.5	口縁部は内丸なし。端部厚みを増し、丸味を持つ。	天井部約1/2(頂部のみ)へう削り。天井部、口縁部内外面回転ナデ調整。	白色砂混入 良 灰白色	均一ちみつ	ロクロ=逆時計まわり(天井部)
環蓋 (S-IV)	9-5 B2-1-001 125-1	— — —	天井部中央に扁平な宝珠形つまみを有する。天井部のノタメは明瞭でない。	天井部へう削り。内外面回転ナデ調整。	ちみつ 不良 灰色	—	—
環身 (S-II)	9-6 B3-2-005 131-4	12.0 14.05 —	立ちあがりはやや外反しつつ内傾する。端部丸味を持つ。受部は内方へ若干傾斜し、端部丸味を持つ。	底部約1/2をへう削り。立ちあがり、受部、底部内外面回転ナデ調整。	白色粒、黒色粒若干混入 良 灰白色	均一ちみつ	ロクロ=逆時計まわり(底部)
環身 (S-VI)	9-7 B2-3-003 127	16.8 — —	口縁部はやや外反する。器壁薄い。体部口縁部内外面に明瞭なノタメ。	体部、口縁部内外面回転ナデ調整。	極小砂混入 良 暗灰色	ちみつ	—
環身 (H-II)	9-8 B3-1-004 130	12.8 — 3.2	口縁部は屈曲し、若干外反しつつ立ちあがる。口縁部、端部は著るしく薄くなる。	不明(器表剥落)	茶色砂混入 良 暗赤褐色	均一ちみつ	—
環身 (H-II)	9-9 B3-2-006 131-9	13.2 — —	口縁部は「く」の字状に外にひらき、やや内丸なし。比較的薄手。口唇部は丸味を持つ。	不明(器表剥落) 体部外面へう磨きか?	茶褐色砂混入 良 暗黄褐色	—	残存率1/2
環身 (H-II)	9-10 B3-1-004 126	11.9 — —	口縁部と体部の間に稜がある。口唇部の器壁は厚い。口唇部近く厚さは減少し、口縁部は断面三角形を呈する。	不明(器表剥落)	茶色砂混入 良 暗赤褐色	均一	残存率1/2
環身 (H-II)	9-11 B3-2-006 131-8	— 13.2 —	口縁部は内方へ「く」の字状に屈曲し、最大径は体部上端にある。比較的薄手。	不明(器表剥落) 体部上半へう磨きか?	茶褐色微粒混入 不良 暗黄褐色	—	残存率1/2
環身 (H-II)	9-12 B3-1-007 128-2	14.8 — —	口縁部は「く」の字状に外にひらき、やや内丸なし。体部は丸味を持つ。	不明(器表剥落) 底部へう磨きか?	小礫混入 良 暗赤褐色	均一	—

器形 (土師・須恵S) 一 群分類	挿図番号等	口径 最大径 器高	形 態	技 法	胎 色 土 成	備 考
環 身 (H-II)	9 - 13 B3-1-007 128 - 4	— 11.6 —	底部丸味を持つ。口縁部は内側へ著しく屈曲し、最大径は体部上端にある。	不明(器表剥落) 底部内外面に指頭圧による(?)凹凸がある。	茶色砂混入 均一 良 薄赤褐色	
環 身 (H-V)	9 - 14 B3-2-004 132 - 3	12.7 — —	体部と底部の境界は若干屈曲する。口縁部内面にあわい凹線をめぐらす。	口縁部内外面回転ナデ調整。	小礫混入 均一 良 暗黄褐色	
高 環 身 (H-I)	9 - 15 B3-2-006 131 - 7	— — —	杯底部と体部の境が屈曲し、屈曲部に稜をつくる。口縁部は外反しつつ外にひらく。	不明(器表剥落)	茶褐色礫混入 不良 暗黄褐色	
高 環 身 (S-III)	9 - 16 B3-2-005 131 - 3	16.9 — —	口縁部は短く外反する。体部上半及び口唇部にへうによる浅い凹線をめぐらす。	体部、口縁部内外面回転ナデ調整。	白色、黒色粒若干混入 均一 良 暗灰色	
高 環 脚 (H-II)	9 - 17 B3-2-006 131 - 10	12.8(底径) — —	脚部外にひらく。端部丸味を持つ。	坏部に脚を差しこみ接合する。内面に若干のシボリメが見られる。	茶褐色砂混入 均一 良 暗赤褐色	
高 環 脚 (H-II)	9 - 18 B3-1-007 128 - 3	— — —	器壁薄い。脚部太く外にひらく。	平らな杯底部に脚を内外より指頭圧により接合する。(器表剥落)	茶色砂混入 均一 良 暗黄褐色	
壺 (H-II)	9 - 19 B3-2-006 131 - 11	— — —	外面に斜格子目文様がある。	肩部内面はケズリ。頸部内面はヨコナデ。	白色粒混入 均一 良 暗茶灰色	
壺 底 部 (H-II)	9 - 20 B3-1-007 128 - 5	12.4(底径) — —	底端部丸味を持ち、やや外に張り出す。	不明(器表剥落)	小中礫混入 あらい 良 暗茶褐色	
甕 (S-III)	9 - 21 B2-1-003 126 - 2	— — —	破片のため不明。	頸部外面はカキメ調整。体部内外面タタキの後ヨコナデ調整。	均一 良 暗灰色	
長 頸 壺 (S-III)	9 - 22 B3-2-003 132 - 4	10.3 — —	直線的に外にひらく複合口縁。あわい凸帯をめぐらす。	内外面回転ナデ調整。	黒色粒混入 均一 良 暗灰色	口縁内面に明緑色自然釉 残存率よ
甕 (H-I)	9 - 23 B3-2-006 131 - 5	19.2 — —	口縁部は外反する。端部丸味を持つ。	口縁部、内外面横位のハケ調整。	白色粒、金雲母粒若干混入 均一 良 暗黄褐色	残存率よ
甕 (H-I)	9 - 24 B3-1-004 129	17.2 — —	口縁部は直線的に外にひらく。端部内側にあわい凹線をめぐらす。	内外面ハケ調整。	小中礫、金雲母粒混入 均一 良 暗赤褐色	

器形 (土師器等S) 一 群 別 類	挿図番号等	口 径 最大径 器 高	形 態	技 法	胎 土 焼 色	備 考
甕 (H-I)	9-25 B3-2-006 131-6	18.2 — —	外反する口縁部は外に折りかえされ肥厚する。	不明 (器表剥落)	小中礫、暗茶褐色粒混入 良 暗黄褐色	外面丹塗か? 残存率 $\frac{1}{2}$
甕 (H-II)	9-26 B2-1-001 125-2	19.2 — —	口頸部は屈曲し、若干外反する。	口頸部内外面ナデ調整。体部内面横位のハケ調整。	白色粒混入 良 灰赤褐色	残存率 $\frac{1}{2}$
甕 (H-II)	9-27 B3-1-007 128-6	15.7 — —	短い口縁部は肥厚し、頸部との境に段をつくる (折りかえし口縁)。頸部のくびれはすくない。	不明 (器表剥落)	小中礫混入 良 暗赤褐色	残存率 $\frac{1}{2}$
坏 身 (H-II)	9-28 C3-2-009 135	11.9 12.5 —	体部は丸味を持ち、口縁部は若干内わんする。端部丸味を持つ。	内外面ヨコナデ調整。	赤茶色粒混入 良 均一ちみつ 暗赤灰色	残存率 $\frac{1}{2}$
坏 身 (H-II)	9-29 C3-1-009 134-4	10.8 11.2 —	体部から口縁部にかけて肥厚し、口縁部は短い。端部丸味を持つ。	不明 (器表剥落) 内外面へう磨きか?	茶色粒混入 良 均一ちみつ 暗黄褐色	残存率 $\frac{1}{2}$
甔 (H-II)	9-30 C3-3-011 140	— — —	—	不明 (器表剥落) 把手接合部に指頭圧痕がある。	暗茶褐色粒混入 良 暗黄褐色	—
坏 蓋 (S-IV)	10-31 C3-1-009 134-2	18.6 — —	天井部は丸味を持ち端部近く外反する。端部は下方にほぼ直角に屈曲し、にぶい稜をもつ。	天井部約 $\frac{1}{2}$ をへう削り。内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 良 暗灰色	残存率 $\frac{1}{2}$
坏 蓋 (S-V)	10-32 C3-3-010 139-2	18.5 19.3 4.7	天井部はふくらみ少く、端部若干外反する。下方へ屈曲する端部は、断面丸味のある三角形を呈する。背が高く小形の宝珠形つまみを有する。	天井部約 $\frac{2}{3}$ をへう削り。内外面、つまみ回転ナデ調整。	白色粒、中砂混入 良 あるいは 灰白色	ロクロ=時計まわり (天井部)
坏 蓋 (S-V)	10-33 C3-3-010 139-1	14.0 14.3 2.9	天井部はふくらみ少く、端部若干外反する。下方へ屈曲する端部は外周へう整形によりくぼみ、内面が若干ふくらんだように見える。扁平な宝珠形つまみを有する。	天井部約 $\frac{2}{3}$ をへう削り。内外面、つまみ回転ナデ調整。端部はへう整形の後回転ナデ調整。	白色中砂混入 良 均一ちみつ 暗青灰色	ロクロ=時計まわり (天井部)
つまみ (S-V)	10-34 C3-3-010 138-2	— — —	背が高く大形。端部丸味を持つ。	つまみ上部は回転ナデ調整。下部接合部はへう削り調整。	黒色粒混入 良 均一ちみつ 灰白色	—
坏 身 (S-V)	10-35 C3-1-009 134-1	13.1 (底径) — —	底部と体部の境に稜をもち、体部は直線的に外上方へのびる。	底部へう削りの後、外周のみへう削り調整。体部内外面回転ナデ調整。	白色黒色粒混入 良 均一ちみつ 暗灰色	ロクロ=時計まわり (底部、体部)
坏 身 (S-V)	10-36 C3-3-010 138-1	11.0 (底径) — —	底部と体部の境ににぶい稜を持ち、体部は直線的に外上方へのびる。体部下半に三条の沈線をめぐらす。	底部へう削りの後、外周のみ回転ナデ調整。体部内外面回転ナデ調整。	白色砂混入 良 均一ちみつ 灰白色	ロクロ=時計まわり (底部、体部)

器形 (土師、須恵S) 群分類	挿図番号等	口径 最大径 器高	形 態	技 法	胎 色 土 成	備 考
壺 (S-V)	10 - 37 C3-3-010 139 - 3	18.8 — —	口縁部は底部から内わん気味に立ち、浅い血状を呈する。	口唇部へう削り。体部内外面回転ナデ調整。	均一 極めてちみつ 極めて良好 灰白色	残存率高
山茶坑 (-Ⅶ)	10 - 38 C3-1-009 134 - 3	6.3(底径) — —	ひしゃげた高台を有する。	底部回転糸切り。体部内外面、高台接合部回転ナデ調整。	小磯混入 均一 良 灰白色	
高 杯 (S-V)	10 - 39 C3-3-010 137	— — —	胴裾部外反する。	内外面回転ナデ調整。	黒色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	
壺 (S-Ⅳ)	10 - 40 C2-2-008 133 - 1	7.8(底径) 17.6 —	底部と胴部の境は丸味を持つ。胴部上半に最大径があり肩部は丸味を持つ。	底部ナデ調整。底部外周から胴部下半にかけてへう削り調整。胴部内外面回転ナデ調整。	白色粒砂混入 均一ちみつ 不良 暗灰色	ロクロ＝時計まわり (底部)
壺 (S-Ⅵ)	10 - 41 C2-2-008 133 - 2	6.2(底径) — —	底部と胴部の境に稜を持つ。	底部外周より胴部下半にかけてへう削り調整。内外面回転ナデ調整。	白色粒若干混入 良 灰白色	ロクロ＝時計まわり (底部)
長頸壺 (S-Ⅵ)	10 - 42 C2-2-008 133 - 3	17.0(底径) — —	胴部下半は直線的に外上方へのびる。底部近くにはわずかに外方へはる厚く短い高台をもつ。	胴部内外面タタキの後、回転ナデ調整。底部から胴下半部にかけてへう削り調整。	白色粒、黒色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	ロクロ＝逆時計まわり(胴下半部) 体部内面に明緑色灰釉か?
杯 (S-Ⅲ)	10 - 43 D3-2-014 145	15.7 — —	天井部周辺に浅く広いくぼみを有する。底部内面に身受けを有し大形。かえりには口縁端部より内側にはいる。	身受け内面へう削り。内外面回転ナデ調整。	均一ちみつ 良 灰白色	残存率高
杯 (S-Ⅳ)	10 - 44 D2-1-012 142 - 1	16.4 16.5 4.5	天井部丸味を持ち端部若干外反する。端部は若干方に屈曲し丸味を持つ。比較的大形の扁平な茎珠形つまみを有する。天井部は比較的大形。	天井部約等をへう削り。内外面回転ナデ調整。端部外周をへうにより整形している。	白色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	ロクロ＝時計まわり (天井部)
杯 (S-V)	10 - 45 D2-1-012 142 - 2	16.3 — 4.0	底部と体部の境に明瞭な稜を有さない。体部は若干外反しながら外上方へのびる。底部は若干張り、断面凹形の厚く短い高台を有する。	底部及び底部外周へう削り。内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	ロクロ＝時計まわり (底部) 底部内面に重ね焼痕
杯 (S-Ⅳ)	10 - 46 D2-1-012 142 - 4	11.1(底径) — —	底部と体部の境は丸味を持つ。底部は、高台より下方へ張り出す。高台は体部直下に接合され、短くやや外方へふんばる。	底部へう削り。高台接合部へう削り整形の後、回転ナデ調整。体部内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	ロクロ＝時計まわり (底部)
杯 (S-V)	10 - 47 D2-1-012 142 - 3	10.0(底径) — —	底部と体部の境は丸味を持つ。底部は若干張るが高台より下方に出ない。高台は短く外方に張る。	底部へう削り。体部内外面回転ナデ調整。	白色、黒色粒混入均一ちみつ 良 灰白色	ロクロ＝時計まわり (底部)
杯 (H-Ⅱ)	10 - 48 D3-2-014 146 - 1	12.8 — —	体部は丸味を持つ。口縁部は若干内わんする。端部丸味を持つ。	不明 (器表剝落)	暗茶褐色砂混入 均一 良 暗黄褐色	残存率高

器形 (土器・灰土器・瓦器) 一併分類	挿図番号等	口径 最大口径	形態	技法	胎土 焼色	備考
高坏 (H-II)	10-49 D2-1-012 142-5	11.2	体部は丸味を持ち、口縁部は内方へ屈曲する。	不明(器表剥落) 体部外面へラ磨きか?	中砂混入 均一 良 暗黄褐色	
甕 (H-II)	10-50 D3-2-014 146-3	19.9	口頸部は外反しつつ外上方へのびる。端部は丸味を持ち若干内わんする。	不明(器表剥落)	中砂混入 均一 良 暗赤褐色	残存率 100%
甕 (H-V)	10-51 D3-2-014 146-2	18.4	口頸部は朝顔状に外にひらく。端部は内面にあわいの凹線をもぐらう。若干上方へ折れまがつたように見える。頸部内面に粘土細接合による稜がある。	口頸部、体部内面横位のハケ調整、外面、縦位のハケ調整の後ナデ調整。頸部内面に指頭圧痕がある。	白色粒、金雲母粒混入 均一 良 暗赤褐色	残存率 100%
甕底 (H-V)	10-52 D2-2-013 144	8.8(底径)	底部と体部の境は丸味を持つ。底部に木葉痕を有する。	体部外面横斜位主体のハケ調整。底体内面ヨココナデ調整。	茶褐色粒混入 均一 良 暗黄褐色	浅鉢の可能性がある。
甕 (S-IV)	10-53 D2-2-013 143	18.1	口頸部は若干外反しながら外上方へのびる。端部を短く直立させ、また下方へ屈曲させている。	内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 均一 良 灰白色	
坏 (S-VI)	11-54 F2-3-015 147-1	16.2	天井端部は屈曲せず、若干下方へおれまがる程度。	天井部をへう削り。内外面回転ナデ調整。	均一 良 灰白色	残存率 100%
坏 (S-III)	11-55 F3-1-018 155-1	9.5 11.7	立ちあがりは低く、内傾の度合は大きい。たちあがり端部、受部先端は丸味を持つ。	内外面回転ナデ調整。	白色粒若干混入 均一 良 暗灰色	
坏 (S-III)	11-56 F3-1-018 156	8.0 11.2	立ちあがりは低く内傾の度合は著しく大きい。受部に浅い沈線をもぐらす。	内外面回転ナデ調整。	均一 良 暗灰色	
坏 (S-IV)	11-57 F2-3-015 147-2	14.0	底部と体部の境は丸味を持つ。体部は直線的に外上方へのびる。底部は下方へ若干よくらみ、体部直下にやや外に張った短く厚い高台を有する。	底部、高台接合部へう削り整形の後ヨコナデ調整。体部内外面回転ナデ調整。	白色粒、中砂混入 均一 良 暗灰色	残存率 100%
坏 (K-VI)	11-58 F2-4-016 148-2	7.2(底径)	底体内側がくぼみ、内わんしているように見える。	底部へう削りの後回転ナデ調整。体部内外面、高台接合部回転ナデ調整。	黒色小砂、白色粒混入 均一 良 灰白色	ロクロ=時計まわり(底部) 底部内面に淡緑色灰釉
盤 (S-V)	11-59 F2-5-017 149-1	15.5	口縁部は体部との境で上方へ屈曲し、屈曲部は外方へ張り出し、あわいの凸帯をつくる。口唇部は平らにへう削りされあわいの沈線があわゆる。端部は比較的小丸味を持つ。	口縁部内面へう削り調整。内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 均一 良 暗灰色	残存率 100%
高台付盤 (K-VI)	11-60 F2-4-016 148-1	9.3(底径)	体部は皿状を呈する。比較的小丸味が高く、端部肥厚する高台を有する。	体部外面へう削り整形の後、回転ナデ調整。体部底面内面回転ナデ調整。高台接合部回転ナデ調整。	黒色粒、中砂混入 均一 良 暗灰色	ロクロ=時計まわり(底部) 体部底面内面、淡緑色灰釉

器形 (土師・埴輪・灰輪)	挿図番号等	口 径 最大径 器 高	形 態	技 法	胎 土 成 焼 色	備 考
環 身 (H-II)	11 - 61 F3-1-019 154 - 1	12.3 — 3.8	体部、丸味を持つ。口縁部は端部丸味を持ち薄くつくっている。底部は比較的平らである。	内外面横位主体のナデ調整。	暗茶褐色粒混入 均一ちみつ 良 暗黄褐色	
高 環 脚 (H-II)	11 - 62 F3-1-019 154 - 2	9.9 (脚底径) — —	脚裾部は外にひらき、端部下方へ若干屈曲する。比較的太く短い脚。	外面縦位のハケ調整の後ヨコナデ調整。内面横位のハケ調整の後、裾部ヨコナデ、上半は手持ペラ削り調整。	小砂混入 均一 良 暗黄褐色	
脚付盤(鉢) (H-II)	11 - 63 F3-1-019 154 - 3	15.7 (底径) — —	太く外下方へふんばる脚。端部は丸く仕上げている。	外面不明 (器表剥落) 脚接合部内面に指頭圧痕。底部、脚内面横位のハケ調整の後ヨコナデ調整。	小、中砂混入 あらい 良 暗赤褐色 (脚内面黒色)	
甕 (H-V)	11 - 64 F2-4-016 148 - 4	22.9 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、端部肥厚し丸味を持つ。口唇部は内傾気味に短く屈曲する。	口縁部内外面横位主体のナデ調整。脚部上半外面は縦、斜位のあらいハケ調整。頭部内面に指頭圧痕が見られる。	黒色粒混入 均一ちみつ 良 暗黄褐色	
甕 (H-V)	11 - 65 F2-4-016 148 - 5	21.6 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は内傾気味に若干屈曲する。端部丸味を持つ。	口縁部内外面横位主体のナデ調整。脚部上半外面右斜位のハケ調整。頭部内面に指頭圧痕が見られる。	小砂粒混入 均一ちみつ 良 暗黄褐色	
甕 (H-V)	11 - 66 F2-4-016 148 - 7	24.3 — —	口頸部は「ㄣ」状に外反する。頭部内面は粘土紐接合のため若干肥厚しあわい稜をつくる。口唇部肥厚し丸味をもつ。	口頸部内外面に指頭圧痕見られる。口縁部内外面ヨコナデ調整か？	極小砂混入 均一ちみつ 不良 赤灰白色	
甕 (H-V)	11 - 67 F2-4-016 148 - 6	24.0 — —	口縁部は著るしく外反し、ほぼ水平に近くなる。端部は肥厚し、丸味をもつ。上方に若干屈曲する。最大径は口径にある。	口頸部内外面ヨコナデ調整。	小砂混入 均一 良 暗黄褐色	
壺 底 部 (H-V)	11 - 68 F2-5-015 147 - 3	11.2 (底径) — —	底部と脚部との境は丸味を持つ。ややあげ底。底部に木葉痕を有する。	不明 (器表剥落)	暗茶褐色粒混入 均一 不良 暗赤褐色	
脚 付 甕 (H-V)	11 - 69 F3-2-021 158 - 3	9.0 (脚底径) — —	脚部はほぼ直線的に外下方へひろがる。端部内面にあわい凹線をめぐらす。	外面不明 (器表剥落) 内面ハケ調整の後ヨコナデ調整。	黒色、暗茶褐色小中礫混入 均一 良 暗赤褐色	
脚 付 甕 (H-V)	11 - 70 F2-5-017 149 - 2	— — —	接合部太い。	接合部外面縦位のハケ調整。内面横位のハケ調整。	極小砂混入 均一 良 暗茶褐色	
甕 底 部 (H-II)	11 - 71 F3-1-019 155 - 2	11.3 (底径) — —	—	不明 (器表剥落)	小砂混入 均一 不良 暗赤褐色	
長 頸 壺 (S-III)	11 - 72 F3-2-020 157 - 1	12.0 — —	口頸部は朝顔状に外反し、端部は上下方にふい稜をつくる。	内外面回転ナデ調整。	雲母粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	残存率 $\frac{1}{2}$

器形 (土師器、埴輪系S 灰輪系) 一 群 分 類	挿図番号等	口 径 最大径 器 高	形 態	技 法	胎 土 成 焼 色	備 考
平 瓶 (S-Ⅲ)	11 - 73 F3-2-020 158 - 1	7.9 — —	口頸部は外反しつづつ上方にのびる。端部は短く外反し、上方にのびい稜をつくる。	内外面回転ナデ調整。	白色粒、雲母粒混入 均一ちみつ 灰白色	ロクロ=時計まわり (口縁内面)
中 型 壺 (S-Ⅳ)	11 - 74 F3-1-017 150	12.4 19.8 —	口頸部は直線的に外上方へのびる。端部は外におりかえされ、上下方にのびい稜をつくる。底部は丸底。最大径は、胴部上半にある。	口頸部内外面回転ナデ調整。胴部内外面タタキ整形の後胴部内面下半は上方に向けての板状工具によるケズリ調整。	白色砂若干混入 均一ちみつ 良 暗灰色	
広口短頸埴 (S-V)	11 - 75 F3-1-018 152	9.9 16.5 —	短くたつ口縁部。口縁端部は外上方にのびい稜を持つ。体部は肩が張り、にぶい稜を持つ。	口縁部、体部内外面回転ナデ調整。肩部直下へう削り調整の後回転ナデ調整。	黒色粒、白色粒混入 均一ちみつ 良 暗灰色	
環 釜 (S-V)	12 - 76 G2-2-022 159 - 1	15.7 16.0 —	天井部は丸味を持ち、端部近く外反する。端部は下方に屈曲し、断面は丸味のある三角形を呈する。薄手。	天部約をへう削り。内外面端部回転ナデ調整。	白色粒混入 均一ちみつ 良 暗灰色	ロクロ=時計まわり (天井部)
環 身 (S-Ⅳ)	12 - 77 G3-2-023 161 - 1	10.4(底径) — —	底部と体部の境に丸味を持つ。底部は、高台より下方に張り出し、中央が若干とがっている。体部直下に外方に張り出す短く作りのあらい高台を有する。	底部はへう切り離しのまま未調整。高台接合部へう削り調整の後、回転ナデ調整。体部内外面回転ナデ調整。	白色粒若干混入 均一ちみつ 良 暗灰青色	ロクロ=時計まわり (底部)
環 身 (H-V)	12 - 78 G2-2-022 160 - 1	12.0 — —	体部は丸味を持つ。口縁部は薄くなり、若干外反する。	体部下半は縦位のナデ調整。口縁部内外面ヨコナデ調整。	均一 きわめてちみつ 良 灰茶褐色	
皿 (H-V)	12 - 79 G2-2-022 159 - 3	17.8 — —	体部、口縁部は若干外反しながらひらく。口縁端部を丸く仕上げている。	体部、口縁部外面はへう磨きの後丹を塗布している。	金雲母粒、小砂混入 良 暗黄褐色	
壺 (H-V)	12 - 80 G2-2-022 159 - 5	12.0 — —	厚く外反する口頸部。端部内面にあわい回線がめぐり上方に屈曲したように見える。	不明 (器表剥落)	暗茶褐色小砂混入 良 暗黄褐色	
聴 (S-V)	12 - 81 G2-2-022 159 - 2	— — —	口頸部はラッパ状にひらく。頸上部にのびい沈線を一列めぐらす。	内外面回転ナデ調整。	白色粒、小砂混入均一ちみつ 極めて良好 灰白色	口縁部内面に薄緑色灰釉か？
甕 (H-V)	12 - 82 G2-2-022 159 - 4	22.0 — —	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸味を持つ。	頸部は縦位のハケ調整。口縁部内外面回転ナデ調整。	金雲母小砂混入 均一 良 暗黄褐色	
壺 (H-V)	12 - 83 G3-2-023 161 - 2	11.6 — —	薄手。短く外反する口縁。端部は丸味を持つ。	口縁部内外面、体部外面ヨコナデ調整。頸部内面箇位のハケ調整。	黒色粒若干混入 良 暗黄褐色	頸部に黒斑
壺 底 部 (H-V)	12 - 84 G2-2-022 159 - 6	6.5 — —	若干上げ底となり、底部外周は張り出す。	接合部に縦位のハケ調整。	小中砂混入 良 暗黄褐色	

器形 (土師、須恵S、 灰黒土) 一器分組	挿図番号等	口径 最大径 器高	形 態	技 法	胎 色 土 成	備 考
環 蓋 (S-II)	12 - 85 H2-1-024 162	13.2 — —	天井部と口縁部とをわける稜は短くする。口縁部は若干内わんし、端部は丸味を持つ。最大径は口径にある。	天井部を以上をへう削り。内外面回転ナデ調整。口縁部外面の回転ナデは凹凸が著しい。	白色粒若干混入 均一ちみつ 良 暗灰色	ロクロ=逆時計まわり(口縁部)
環 身 (S-II)	12 - 86 H3-2-025 164-1	10.5 13.1 3.8	立ちあがり若干内傾し、端部は丸味を持つ。受部にあわい沈線が一条めぐり、端部を丸く仕上げる。底部は上げ底となっている。	体底部約 $\frac{1}{2}$ をへう削り。受部へう削り調整。内外面回転ナデ調整。体部内面調整不良。	白色粒混入 均一ちみつ 良 暗灰色 暗灰色	ロクロ=逆時計まわり(底部)
環 蓋 (S-V)	12 - 87 H3-4-027 167-1	16.3 16.6 —	天井部は比較的扁平。端部は下方へ屈曲するが全体として丸味を持ちあまい。	天井部約 $\frac{2}{3}$ をへう削り。内外面回転ナデ調整。	白色粒砂、黒色粒混入 均一 良 暗灰色	
環 身 (S-V)	12 - 88 H3-4-026 165-2	16.5 — 5.2	体部と底部との境にあまい稜をもつ。体部は外上方へ直線的にのびる。口縁端部内面にあわい凹線がめぐる。	底部及び底部外周へう削り。体部内外面回転ナデ調整。底部内面にへう状工具による数条のひっかき痕がある。	極めてちみつ 均一 良 暗灰色	ロクロ=時計まわり
環 身 (H-V)	12 - 89 H3-2-025 164-4	11.3 — 4.0	体底部は丸味を持つ。口縁部は若干外にひらき端部丸味を持つ。薄手。	不明(器表剥落) 全面ヨコナデか?	暗褐色小砂混入 均一 良 暗赤褐色	
高 環 脚 (S-III)	12 - 90 H3-4-027 167-2	11.5(底径) — —	裾部はラッパ状にひらき、端部内面にあわい凹線がめぐる。上下方ににぶい稜をつくり出している。	脚上半にはシボリメがみられる。内外面回転ナデ調整。	均一ちみつ 極めて良好 黒灰色	
甕 (H-V)	12 - 91 H3-2-025 164-5	23.0 — —	口頸部は大きく外にひらき、端部は上方に屈曲する。	口頸部内面へう磨き。外面こまかいハケ調整の後、口縁部のみヨコナデ調整。	白色粒雲母粒混入 均一 良 黒褐色	
甕 (H-V)	12 - 92 H3-2-025 164-6	20.7 — —	口頸部は「C」状に外反し、端部は肥厚し丸味を持つ。頸部と胴部の境内面に粘土紐接合によるにぶい稜をもつ。	不明(器表剥落)	白色粒砂混入 不良 暗赤褐色	
甕 (H-II)	12 - 93 H2-1-024 163	10.1(底径) — —		外面ハケ調整。把手接合部に指頭圧痕がある。内面剥落不明。	小中砂混入 あらい 良 暗赤褐色	
甕 底部 (H-II)	12 - 94 H3-4-027 166	14.8(底径) — —		不明(器表剥落)	暗茶褐色小中砂混入 良 暗黄褐色	
長 頸 壺 (S-V)	12 - 95 H3-2-025 164-2	— 17.3 —	体部は全体に丸味をもつ。肩ににぶい稜を持つ。	内外面回転ナデ調整。	白色粒小中砂混入 極めて良好 暗灰色	体部上半濃緑色灰釉か?
長頸壺底部 (S-V)	12 - 96 H3-2-025 164-3	7.9(底径) — —	底部は丸味を持ち、外方には、厚く短い高台を有する。	高台の接合あらい。底部ナデ調整。内外面回転ナデ調整。	白色粒小中砂混入 極めて良好 暗灰色	底部内面、明緑色灰釉か?

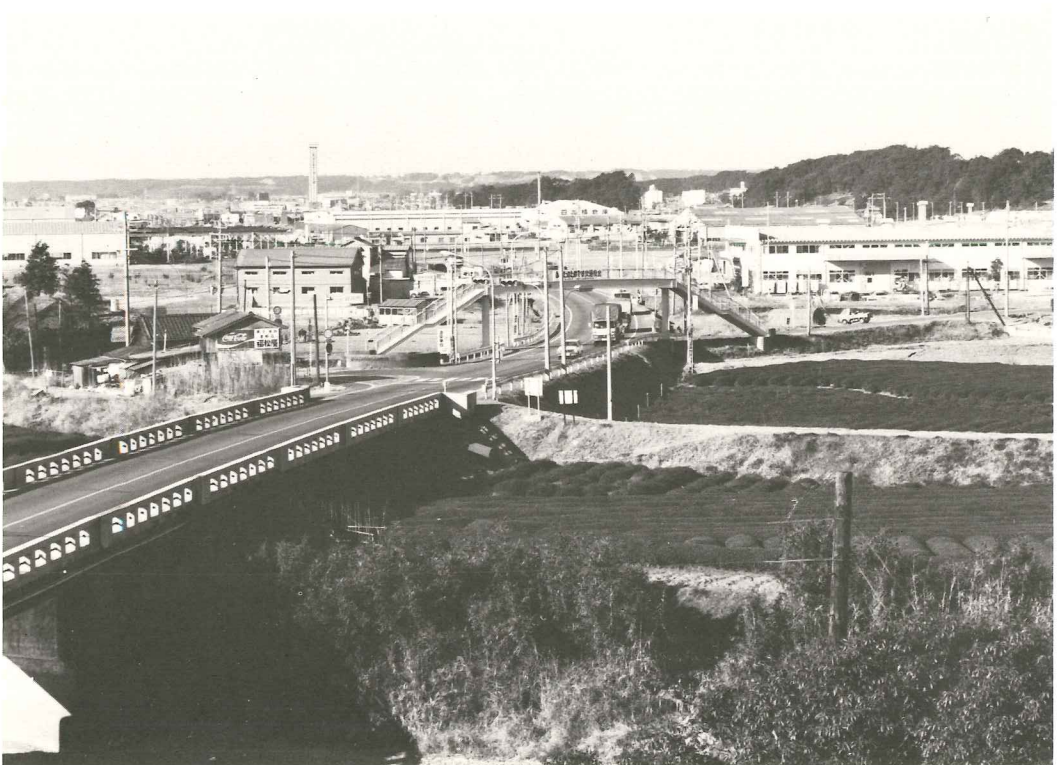
器形	挿図番号等	口径 最大径 高	形 態	技 法	胎 色	備 考
土師H (灰緑K) 一群分属						
環 身 (K-VI)	13 - 97 I 3-3-028 169 - 2	7.0 (底径) — —	体部は直線的に外にひらく。外方に張った高台を有する。	体部内外面、高台接合部回転ナデ調整。	白色粒、中砂混入 均一 良 暗灰色	底部内面薄緑色灰釉 重ね焼痕
環 身 (K-VI)	13 - 98 I 3-3-028 169 - 1	7.0 (底径) — —	外方に張った短い高台を有する。	底部回転糸切り。高台接合部回転ナデ調整。	白色小砂混入 均一 良 暗茶灰色	体部内面薄緑色灰釉 重ね焼痕
環 身 (K-VI)	13 - 99 J 3-3-028 170	8.4 (底径) — —	著るしく外方に張ったひしゃげた高台を有する。	底部回転糸切り。高台接合はあらい。内外面回転ナデ調整。	白色砂若干混入 均一 良 灰白色	
環 身 (K-VI)	13 - 100 J 3-3-028 171	7.8 (底径) — —	内わんし、端部丸味を持つ高台を有する。	底部へう削り。高台接合部内外面回転ナデ調整。	白色粒混入 均一 良 灰白色	体部内面、明緑色灰釉 重ね焼痕
甕 (H-V)	13 - 101 I 3-3-028 169 - 3	21.3 — —	口縁部はラッパ状に外反し、端部は上方に屈曲する。	口頸部外面横位のハケ調整。口縁部内外面ヨココナデ調整。	白色粒、金雲母粒混入 均一 良 暗褐色	
高 環 (H)	13 - 102 F 3-2-021 157 - 2	6.4 (底径) — —		手すくね。指頭圧痕めだつ。	極小砂混入 均一ちみつ 良 乳灰色	
土製支脚 (H)	13 - 103 C 3-3-011 141	9.0 (底径) — —	凹凸多くつくりはあらい。断面円形を呈する。	大小の指頭圧痕。	小砂混入 均一ちみつ 良 褐色	
土製支脚 (H)	13 - 104 D 3-2-014 146 - 4	— — —	凹凸多くつくりはあらい。断面円形を呈する。	大小の指頭圧痕。	均一ちみつ 良 灰黄褐色	
土師馬脚 (H)	13 - 105 B 2-1-003 126 - 3	0.9 ~ 1.1 (径) 4.3 (長)	胴部との接合面で折れている。凹凸少い。断面円形を呈する。	接合面に指頭圧痕。	小砂混入 均一ちみつ 良 灰黄褐色	
土師馬脚 (H)	13 - 106 G 2-2-022 160 - 2	0.9 ~ 1.1 (径) 3.3 (長)	凹凸少い。断面円形を呈する。		均一ちみつ 良 灰褐色	
環 身 (S-V)	13 - 109	10.8 (底径) — —	底部と体部の境に丸味を持つ	底部回転ナデ調整の後、外周を残しへう削り調整。	黒色粒混入 均一ちみつ 良 灰白色	底部にへう記号 「日根口」墨書



坂尻遺跡周辺の地形



坂尻遺跡遠景（西方より）〈協力、日本エレベーター工業㈱〉



坂尻遺跡遠景（東方、掛川市原川より）



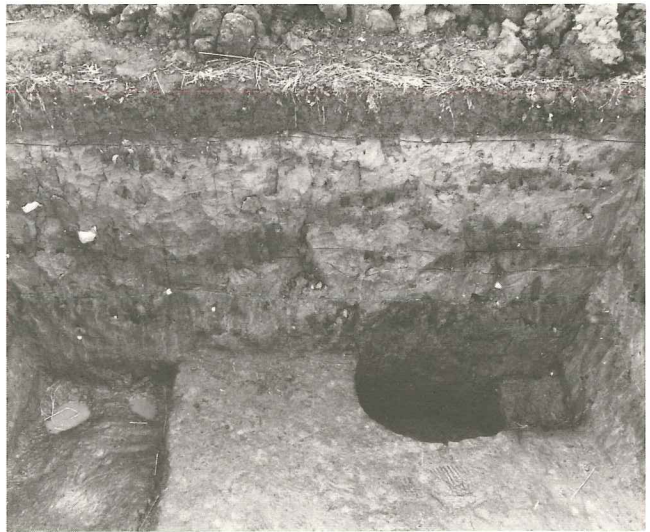
西区南 (B2,3,C2,3,D2,3区)グリット発掘状況



道路北半グリット発掘状況

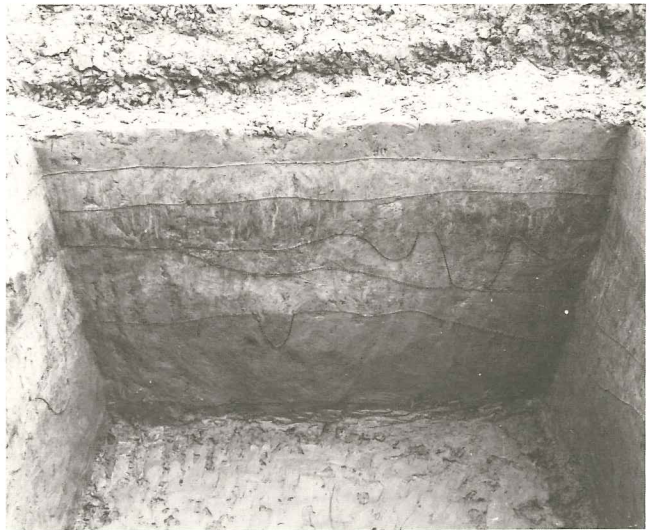
B3-3G 南面セクション

Ⅲa層がⅢb層内へ落ち込む
柱穴状遺構



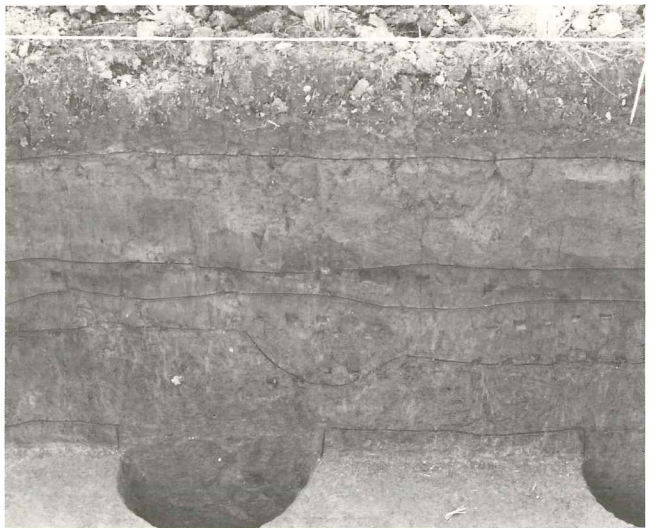
D2-1G 南面セクション

Ⅲa層がⅢb層内へ落ち込む
柱穴状遺構



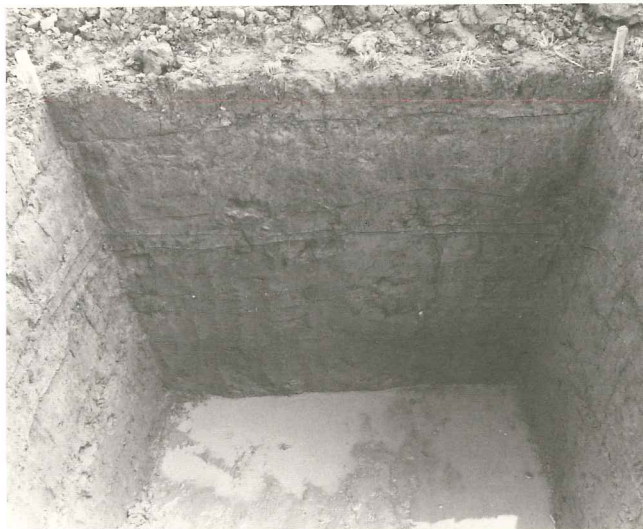
D3-1G 南面セクション

Ⅲa層がⅢb層内へ落ち込む
柱穴状遺構
明瞭な黒色有機質粘土層が
観察できる。



H2-1G 南面セクション

II層内に甗(第12図-93)が見える。



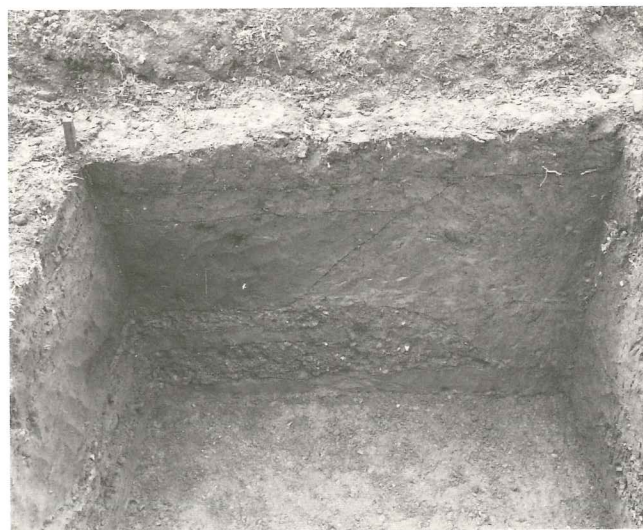
I 3-2G 南面セクション

耕作土下、IIIa, b層が厚く堆積する。
I区内, IIIa, b層は明確に区分できない。



L2-1G 南面セクション

旧河道を思わせる砂礫層と粘土層
の互層形成状態。
堆積は基本的にレンズ状を呈する。



B3—1G II層内遺物出土状況



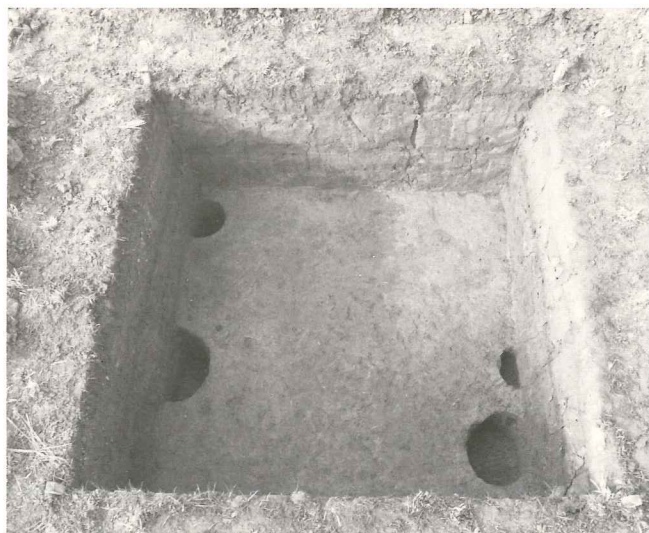
B区内のII，III層は小中礫を多量に含む。

H3—4G 土器集中部



大甕片が多く、礫を多量に混入する。

D3—1G 柱穴状遺構



III b層上面で確認できる柱穴状遺構

一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）

埋蔵文化財発掘調査報告書

—坂尻遺跡第1次調査—

1981年3月31日

編集 袋井市教育委員会

浜松市中沢町1-1

印刷所 株式会社 開明堂